95
74

五大洲探檢記

第二卷

南洋印度奇觀

五大洲探檢家
中村直吉
押川春浪共編

95-74

五大洲探檢記
2

南洋印度奇觀

五大洲探檢家 中村直吉
冒險世界主筆 押川春浪 編

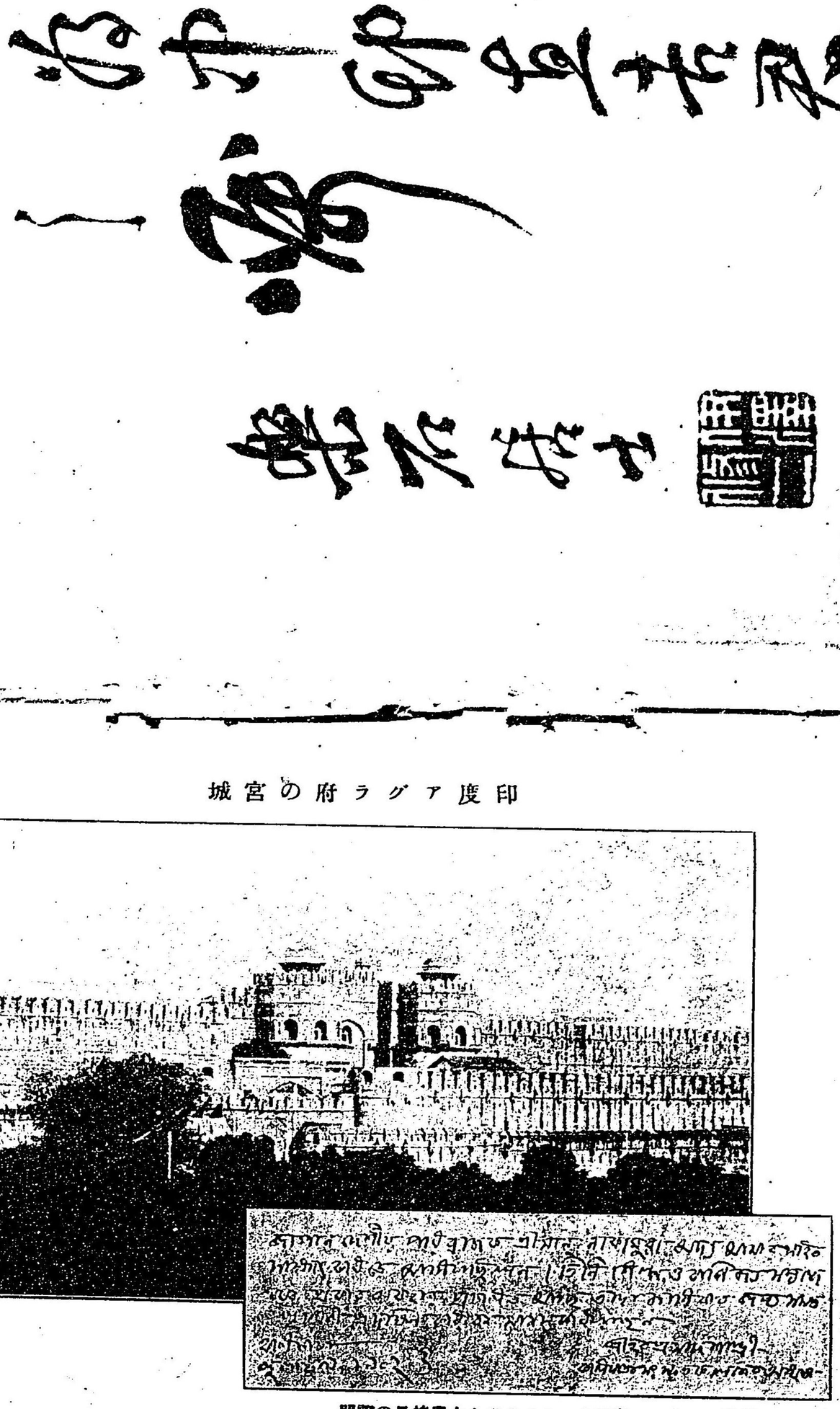
明治
4 1 8
内交

東京 博文館 藏版

中西萬曜

妙院陳

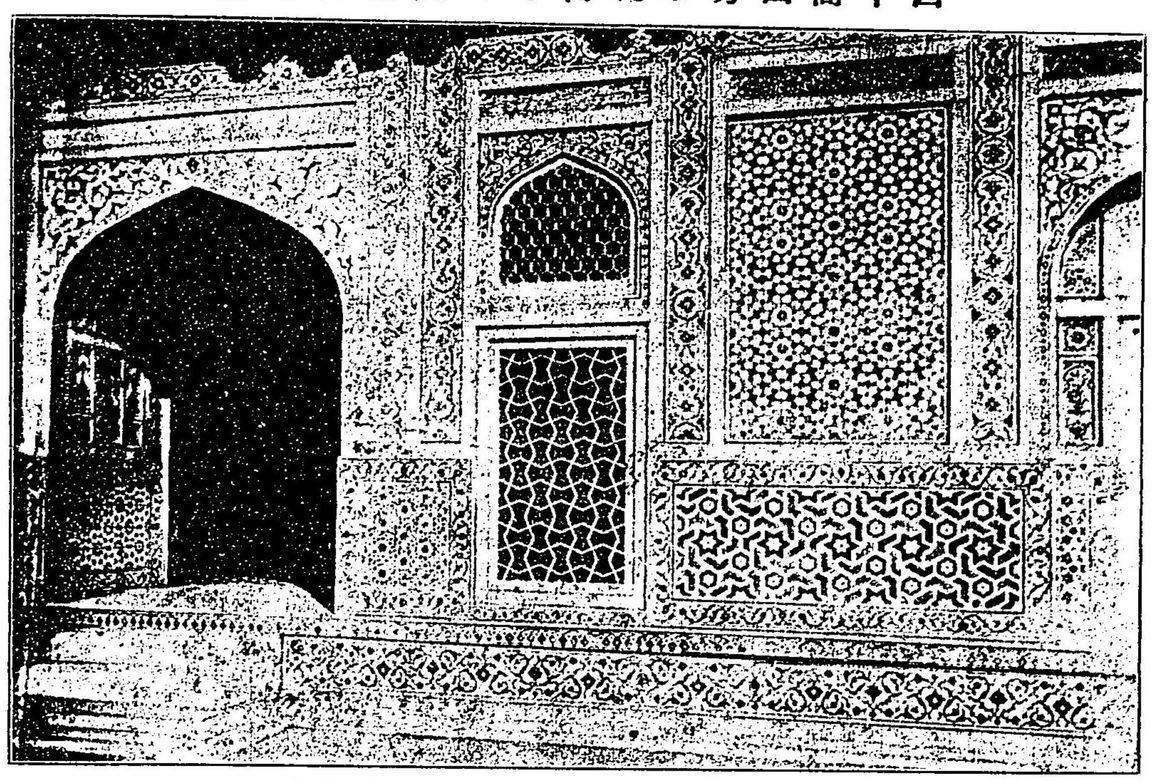
同來同寫



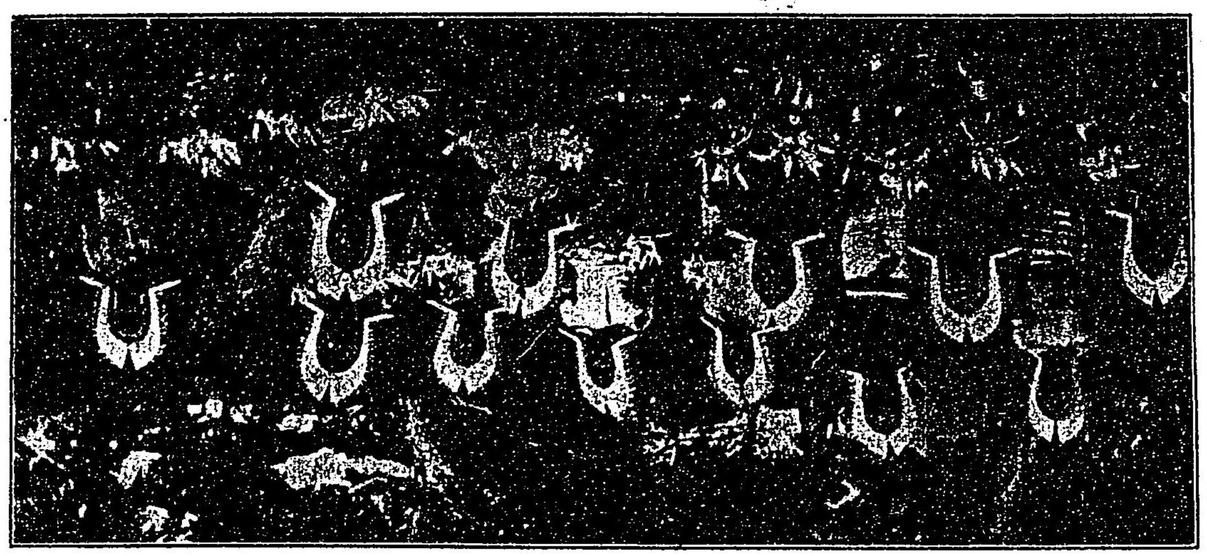
印度アグラ府の宮城

明證の長總學大トツリクスンサの府タツカルカ度印

四十間四方の純白なる大理石建築



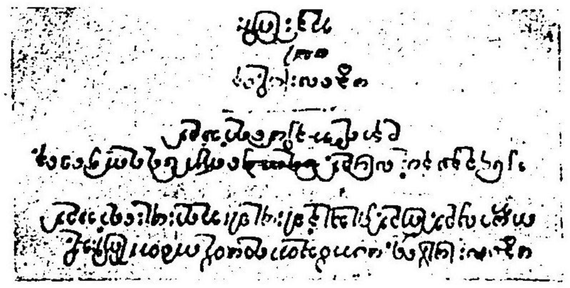
印度アグラ府のマホメット大寺院



伝風葬儀禮祭の人土匈絵

帯皮の匈絵

明鏡の氏フクミヲ骨盤副件ーハダンマ匈絵



馬來の通貨

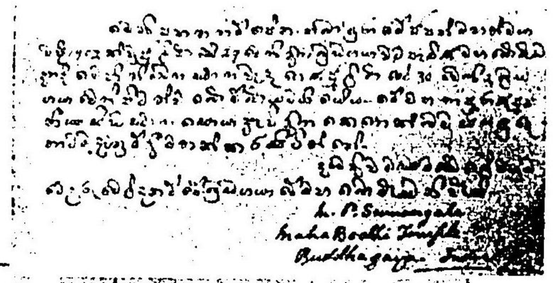
馬來ジョホール宮內大臣アカイッド氏の證明

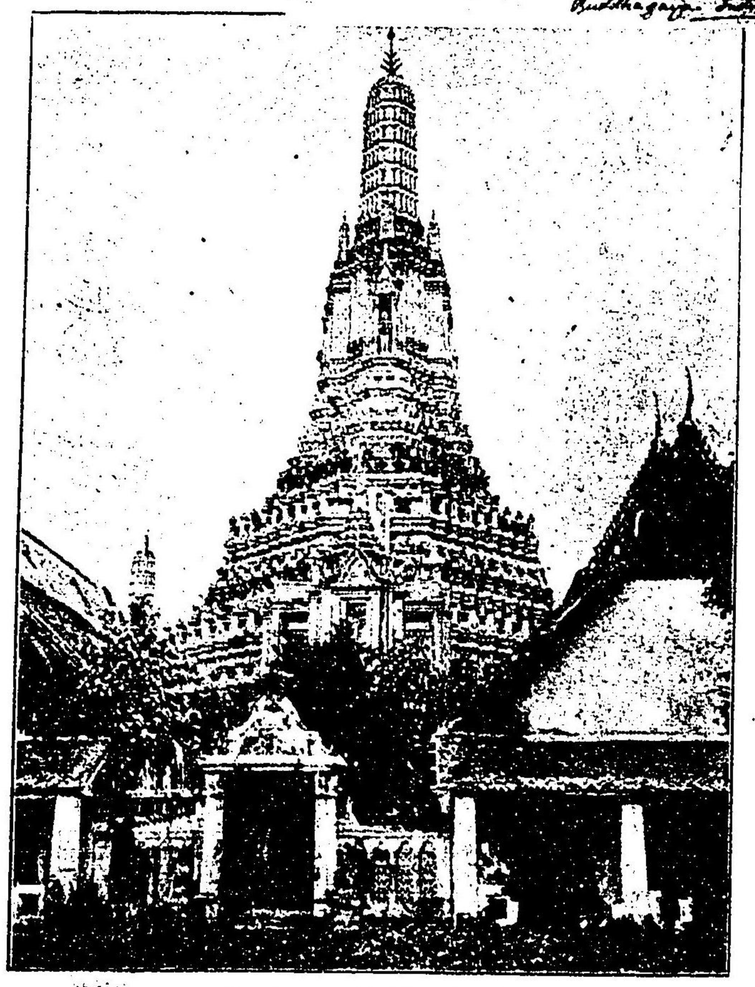
馬來半島田舍の象旅行

印度の通貨

馬繪るせ拜尊の徒信教トツメホマ度印

佛跡伽耶の大僧正スマンガラ氏の證明

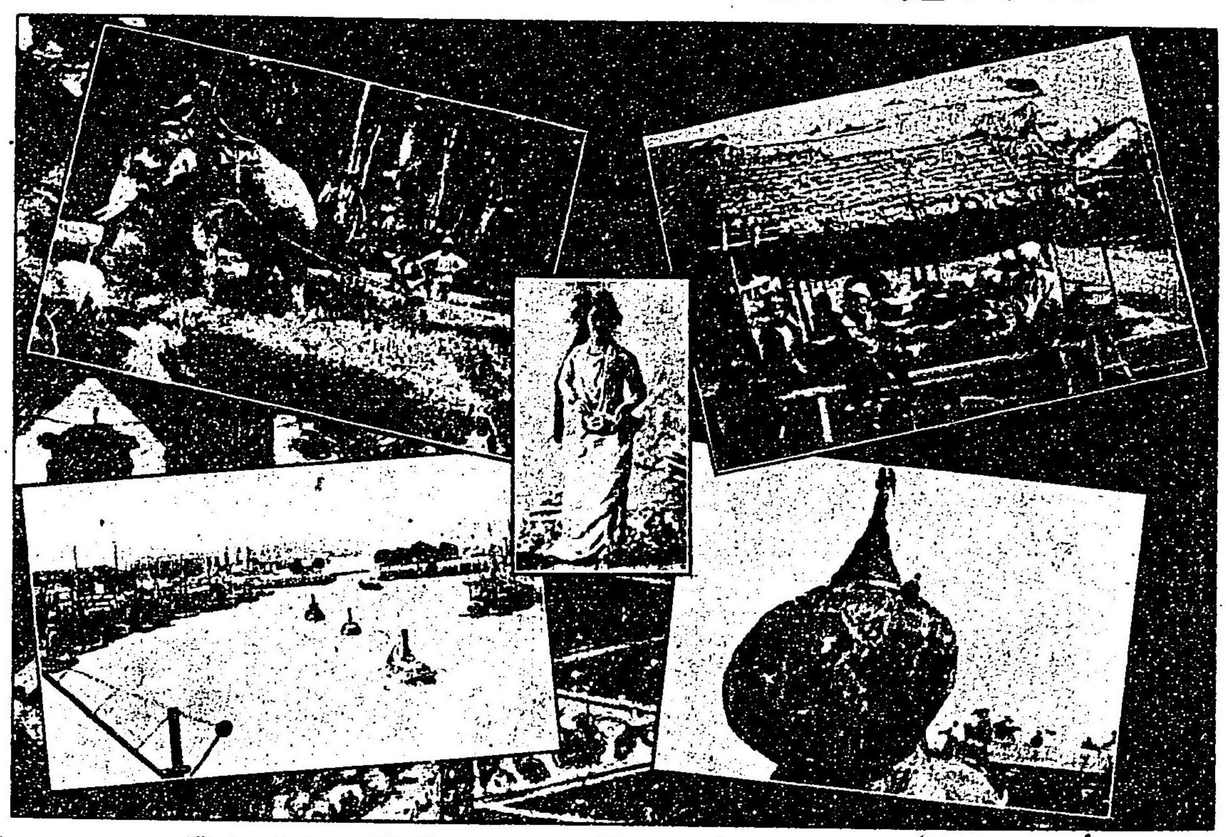




印度伽耶の佛跡

印度に於ける象の材木運搬

スマトラ土人の田舎住居



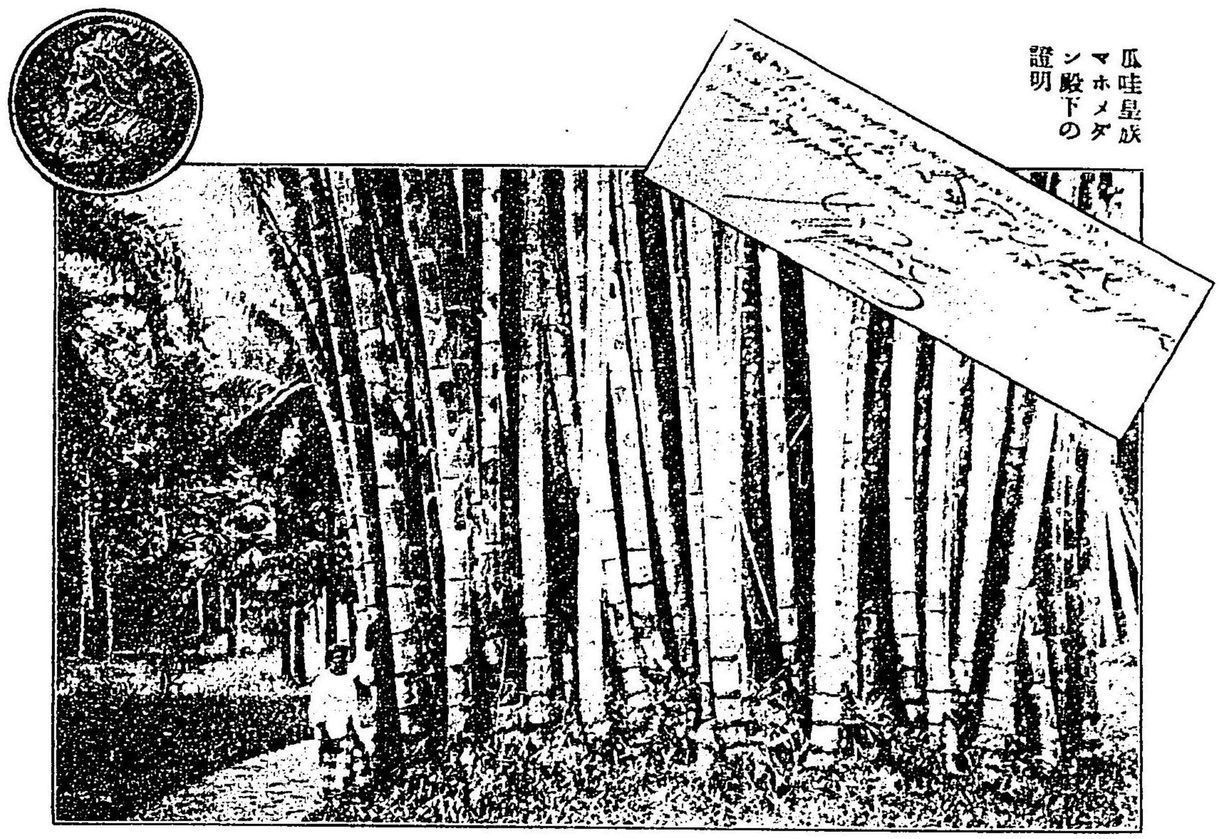
瓜哇の本更紗

瓜哇バタビヤ港

緬甸の美人

緬甸の佛跡

瓜哇の貨幣



世界無比の瓜哇ブリッテンゾロー大植物園

五大洲探檢記 第二卷

南洋印度奇觀目次

目次

(一) 快男子岩本千綱君……一

巡羅探檢家——佛骨奉迎會の先達——佛跡參拜會——常盤木旅館——支那酒で健康を祝す——赤道直下の夜——毒酒にでも醉たやう——ジョホール王の宮殿

(二) 新嘉坡の醜業婦……一〇

日本人の面汚し——發展の先驅者——日本婦人ばかりでない——日本遊廓の起源——誘拐の方法——印度人の高利貸——一人に就き八百圓——鐵石熔る赤道直下——正氣の沙汰とは思はれない

(三) 甲板客の自然主義……一九

瓜哇島ソラバヤに向ふ——甲板客の生活狀態——何でもカレー粉だ——五本の指が箸の代用——嚴重なる男女關係——亭主の隙を狙つて——馬來人の姦通騷ぎ——困つたのは船長——毆合が始まつた

(四) 赤道通過……二九

南航十時間——赤道祭——海員間の迷信——日本軍艦の赤道祭——滑稽なる餘興演藝——印度人の水夫——不思議——不思議——舵機周障——マウントカラン——リガンスの古跡

(五) 家庭の大慘事……四〇

最愛の妻を見んとする加藤君——纏綿たる情緒——ソラバヤ入港——便利な支那人旅館——土産物を山ほど積んで——人間の至情——妻君の行衛不明——意外の新事實——掌中の玉を拔かれた加藤君——憎むべき不義漢——謝罪金二百圓——詐證文一札

(六) 南洋探檢家副島八十六君……四八

愉快な豪傑——闇の探取——瓜哇深林の探檢——一葉の秘密地圖——南洋を舞臺としての活動——スマラン市に向ふ——ジョクジャ市舊會長を訪ふ——双肌脫ぎの王樣——黃金造りの短劍——更紗と藍の話

(七) 瓜哇珍談……六〇

官營旅館——世界第一の植物園——壯觀驚くに堪えたり——土人の自然主義——瓜哇島に於ける日本の遠征娘子軍——バタビヤ市——東洋第一の築港——白人の服裝——珍奇妙々の屯田兵——人見市太郎君の同情——驚くべき支那人の勢力

(八) スマトラ島探檢……七五

バタビヤ出港——日本遊廓——幻燈器械の寄贈を受く——惡臭橫溢——甲板に於ける宗教的勤行——船中の大珍事——無禮なる馬來人——林君の鐵拳——上を下への大騷動——ランゲン號

(九) 彼南に於ける幻燈會……八六

玉轉がし——纏つた旅費が必要だ——そこで幻燈會と氣が付た——急稽古の馬鹿囃し——觀客は日本女郎諸君——眞黑なお客樣が押寄せて來る——大拍手大喝采——財布も重くなつた

(十) 猛獸の如き婦女誘拐者……九四

再びスマトラ島探檢の途に上る——獸慾の犧牲——暗黑なる甲板——惡鬼の如きピンプ——スマトラ內地に日本婦人四百人白人の妾となる——月給三四十弗——日本人の無賴漢——裸體一貫元の默阿彌

(十一) 林中の冒險……一〇一

大仕掛の煙草園——一癖ありげの女將軍——遠征娘子軍の幹部——お勝老嬢の厚意——鬱蒼たる熱帶の密林——恐しげなる大蛇——一羽の猛鳥——數十頭の大象群——辛くも本道に出づ

(十二) 馬來半島を經て緬甸に入る……一一二

激烈なる熱病に罹る——親切なる介抱——關貫迄無賃乘船——日本雜貨店——マンダレー迄無賃乘車——緬甸人の風俗——茫漠たる米田——飛込んだ處が計らずも醸業窟

(十三) 秘密乘車……一二四

島村おさき嬢——此處でも例の幻燈會——ほんとに面白かつたわ——大に優待された——美人馬車を騙つて吾盟を停車場に追ふ——理事者が不在だ——只乘りと決心——驛長の同情——一等室に頑張つて居た——奇策を廻らす

(十四) 汽船ラン號に於ける奇遇……一三七

ペゴ大寺院——面白い緬甸人の名——見たやうな人だ——一等運轉士ピーターセン君——那威號の舊知——悲慘なる最後——小說の如き因緣話——老船長の追回談——寃海の如きベンガル灣——五百羅漢の裸體踊

(十五) 牛糞の如き印度人……一四六

カルカツタ市——恐しい人食鳥——何とも早やお目出度い——動物園——エドン公園——市街は牧場の如し——點々たる牡丹餅の壁——是れ悉く牛糞ならんとは——薪炭の代用——婚禮行列——日本人倶樂部

(十六) スードラの奇習……一五六

處女の屍體と交らしむ——轉た凄慘の感に打れる——一婦多夫の習慣——天下第一の無精者——盜賊種族——世襲の權利だ——サルタン愛想を盡かす

(十七) 厄介な波羅門……一六二

極端なる潔癖——入浴狂——滑稽なる水喧嘩——用便しても入浴——さうかと思ふと手鼻をかむ——見てると吹出したくなる——相交るの後十六回の含嗽をする——沒常識なる診察法

(十八) 天下の奇習……一七〇

外國人を禽獸視する——波羅門の郵便配達——牛を殺すと地獄に墮る——拷問位は平氣なものだ——神樣の借金——神樣の病氣——馬鹿な信者——波羅門の

五大罪——霊水浴の奇習

（十九）波羅門の苦行……一八一

火燄に包まれて太陽と睨競べ——チデイ、マリの大苦行——殴られるのは前藝だ——戰慄すべき木藝——血の滝津瀬——赤熱の鐵棒を跣足で渡る——二本の針で唇を刺して數十里を歩行す——總て想像以上だ

（二十）亂暴極る宗教的儀式……一八七

杯盤狼藉——姦通隨意——醜態見るに忍びず——神婢は僧侶の妾——片手間に他人の枕席に侍す——亂暴なる御詫宣——熱鐵を以て神妻の臀部を灼く——イヤハヤ驚くの外はない

（二十一）珍談餘錄（一）……一九六

貝葉と鐵筆——貨幣代用の貝殼——印度に於ける惡疫流行の原因——白いのが好かれるか、黑いのが珍重されるか——厄介な鼻環——痩せこけた印度の牛——一頭二圓五十錢乃至三圓だ

（二十二）珍談餘錄（二）……二〇四

印度人の繁文縟禮——妙な挨拶——血族結婚は平氣だ——寡婦の結婚は絶對に

不可能か——嚴酷なる姦婦の制裁法——殉死——殉死者は祀らる——葬式の泣女

（二十三）迷信で凝固つた印度……二一六

英國政府の苦心——印度の教育事業——印度人の英人を惡む所以——牛肉を食ふべからず——狂的迷信——馬鹿げきつた經文——牛糞を喰ふ——滑稽極る年中行事

（二十四）汽車中の珍事……二二六

カルカツタ出發——快僧藤田德明和尚——亂醉せる英兵——一場の口論——下車ろ！下車ろ！——剃立の頭を光らせて——和尚英兵を取つて投げる——平に御用捨——面倒な事が持上つた

（二十五）佛陀伽耶の佛跡……二三六

和尚立ちながらパンと燒肉をパク付く——無法な馬車屋——坦々たる大道——菩提樹下の休息——森を隔てゝ一大高塔を望む——大聖死して靈跡獨り寂びたり——心なき番人——菩提樹結婚式——ダルマ先生

（二十六）壯麗なる舊都アグラ府……二四七

孟買に向ふ――ベレナスの佛跡を訪ふ――タージ、マハル――純白大理石の回回教寺院――餘りの立派さに呆れてしまつた――アグラを見ざれば印度を語るべからず――グワリオル猶城――魂は有頂天外に飛ぶ――昔の回教徒――現今の回教徒はダメだ

（二十七）印度南部の旅行……二五七

牛鍋を圍んで快談――林領事の赴任――孟買出發――呑氣な馬車屋――親切な醫者――小津君の同情――日本式發藥法――人糞肥料苦心談

（二十八）汽車轉覆の大慘事……二六七

堪え難き足痛――牛車旅行――呆氣に取られた巡査――知事官邸――親切なスパーク君――自轉車で汽車と競走――汽車轉覆――目も當てられぬ慘狀――大手術場の如くだ

（二十九）野蠻極る拜火教の葬式……二七六

生きた案山子――滑稽な便所の表示法――パルシーの話――慈善動物病院――絹織物會社――拜火教の葬式――花園の如き墓地――恐しき人食鳥――屍體を啄む――鬼哭愁々

目次

（三十）愈々蠻境探檢の途に上る……二八七

福島將軍の激勵――外務省の令達――森山法學士驚いて旅程を變更す――豪傑中村春吉君――有繋の豪傑も驚いた――危險なる波斯旅行――生死係め期すべからず

終

南洋印度奇觀

五大洲探檢家
中村直吉
押川春浪 共編

(一) 快男子岩本千綱君

巡羅探檢家——佛骨奉迎會の先達——佛跡參拜會——常磐木旅館——支那酒で健康を祝す——赤道直下の夜——游酒にでも醉つたやう——ジョホール王の宮殿

那威號(ノールウエーがう)で暹羅(シヤム)から新嘉坡(シンガポール)に歸(かへ)つて二

三日經つと、郵船會社歐洲航路船常陸丸が入港してきた。恰度其時波止場附近を散歩いて居ると、常陸丸の船客が續々と上陸してくる。異境で同胞に遭遇す位心嬉しいものはない。自分でさう思ふ故か、今上陸してきたばかりの人達も、何だか懐しさうな眼付で行過る。隨分氣取つた紳士風なのがある。是等は歐羅巴へと志すのであらう。中には如何はしいのが上陸つてくる。多分日本の喰詰者であらう。出船千艘あれば入船千艘ある新嘉坡、其波止場の繁盛はさておいて、黒白黄とり〴〵の人種の配合を波止場附近にブチ撒けた珍趣妙景、是ぞ此地を措いては他に見られぬ圖なりける。

然るに此雜鬧中を悠々閑々、脇目も振らず近づき來る一壯漢を見受けた。其纒へるマント然たる支那絹綢の旅裝は、紛糾せる路上の群集中にあつても大に異彩を放つて居る。軀幹長大、眼光烱々、威風四邊を拂つて眼前十歩の近きに來つたとき、吾輩は此男決して尋常平凡な人間でないと思つたから、名乘りあ

つて見ると、是なん遲羅探檢家岩本千綱其人であつたので、互に其奇遇を喜びあひ、打連立つて市街の方へと向つた。

嘗つて數年前京都本願寺が主催となつて、佛骨奉迎會なるものを企てたことがある。イヤ企てたばかりでない、現に其佛骨なるものは遲羅から迎えられて今は名古屋にある筈だ。此佛骨奉迎會と岩本千綱君とは斷つても斷れぬ緣故がある、緣故があるばかりでない、其黑幕は實に君であつたのである。

釋迦の頭蓋骨が遲羅にあることは確かな傳説らしい、千綱岩本君が遲羅を探檢して耳にしたのは此傳説で、竊かに微笑みながら歸來直ちに是を本願寺に諮ると、元來が山氣澤山俗氣滿々たる本願寺のことだから、夫よからんと御信心の愚男愚女を説き勸めて、遂に彼の佛骨奉迎會なるものが組織され、そこは同じ佛敎國だけに御奇特な遲羅の王樣を説伏せ、岩本君が其立場から自ら會の大先達となり遲羅に押渡つて、首尾能く佛骨の分配を受けて歸り來り、擧國の善

男善女をして隨喜の涙を財布と共に絞らしめ、外觀的には非常なる成功として四方の羨慕を一身に集めたやうだが、當時奉迎會なるものゝ裏面に行はれたる幾多腐敗事が、如何に世の識者をして面を反けしめたかは、吾人に取つてはまだ新しい記憶であつたのである。固より之を企て是が大先達になつた岩本君は罪はなかつたが、兎に角種々なる非難攻擊の聲が、神聖なるべき佛骨奉迎會の如きに浴びせ掛けられたのは、實に千秋の遺憾事で岩本君の爲めにも、誠に氣の毒な次第であつたのである。

併し千綱岩本君の如きは當世稀に見る快男兒である。異常なれども意味ありげなる其風態、如何か企つる處やあると、ソロ〳〵水を向けて聞き出したのが佛跡參拜會のことであつた。で、其趣意を聞くと斯うだ。

印度ブダガヤの佛跡は有名なものであるが、岩本君の企てた佛跡參拜會といふのは、此ブダガヤに詣でんための會で、岩本君の此行は其下調べの爲めであ

るとか。而して其參拜の土產としてブダガヤの砂を持歸り信者に配たしめんと語つた岩本君は、實に天下の策士で、彼の東京近在は羽田の穴守稻荷に參詣した恐人共が、勿體さうに稻荷構內の砂をさへ戴いて歸るのを見れば、ブダガヤの砂は佛敎信者に取つては、遙かに穴守稻荷の砂以上の難有味があるに相違ない。

併し吾輩其時考へた、佛跡參拜會は强ち惡い催しではないが、比較的成功したと稱せらるゝ佛骨奉迎でさへ、其裏面には言ふに忍びざる醜聞があつたといふから、なることなら岩本君をして斯る事に關係させたくないと思つた。佛跡に參拜する人が悉く釋迦牟尼世尊の如くなるに非ずんば、到底腐敗事の免かれ難いことは、火を睹るよりも明かな話で、寧ろ岩本君が早く此點に氣付いて、斯る山師然たる事業から其身を退け、何故に一日も速かに自縄自縛の苦を免かれないのかと怪しんだ位で、果せるかな其名に於て美なる佛跡參拜會は、後に

至つて終に失敗に歸し、空しく世の嘲笑を受くる悲境に陷つたのである。

吾輩は當時忌憚なく思ふ處を以て岩本君に披瀝したけれども、君は深く信ずる處あるものゝ如く、吾輩の厚意は諒として呉れたが、何處までも事業の成功を見ずには置かないと言つて切りに頑張つて居た。

旅は道連れ世は情、吾輩とても好んで佛跡參拜會の前途を悲觀したのでないから、話が一段落を告げてからは、互に酒々落々、罪のない雜談に吾を忘れて燒けつくやうな太陽熱を浴びながらも、涼風徐ろに到るの思をした。

當時吾輩の止宿つて居たのが常磐木といふ日本人旅館、岩本君に宿はと訊くと、まだ何處といふ豫定もないとのことに、然らば同道せんと、相共に常磐木に歸つた。

岩本君が旅裝を解いて彼是すると最う夕方、熱鐵の如き太陽が引込むと、赤道直下の新嘉坡でも、海陸軟風の原理は爭はれないもので、日沒時からはソヨ

ソヨと涼しい風が吹き出した。實に熱帶生活も是だから助かるので、日中は焦げつくやう、夜は蒸されるやうに暑かつた日には、赤道附近の人間恐らく今迄生きてる奴はなからう。天は斯の如く殘忍なものでない、夜になると赤道直下とは思へない程涼しくなる、全く能くしたものである。

其晩岩本君を拉して散歩に出掛けた。不潔い支那街から例の日本の遊廓を見て、歸途に支那料理店に上り込み、互に祝杯を擧げることにした。

西洋流ならば三鞭酒といふ處だが、支那料理店だから支那流が能からうといふので、サンスウといふ支那酒を、雛人形に備へるやうな小形の盃に注いで飲み始めた、御馳走はチャプシユウ、モウヨウクワンの如きものであつた。

吾輩は酒と聞いては身震いする程の弱虫である。然るに岩本君は天下の酒豪である。飲む程に仰飲る程に、顏は渥丹の如く氣は虹の如くだ、興趣切りに湧いて德利の死屍累々、辛烈舌を燒くが如き支那酒を、能くも斯程迄飲めたもの

かなと、感心したといふより寧ろ呆れて見て居ると、餘程涼しくなつたとはいへ赤道直下の夜、酒の氣と煙草の煙で室内の空氣は非常に熱してきた。吾輩も居堪らなくなつたので、岩本君を拉し戸外に出でやうとすると、最う堪えきれない程頭痛がしだした、心臓の鼓動は早鐘でも撞くやう、視界は段々朦朧としてくる。唯事ならぬ容態に自分でも驚いたが、此處で僻易れる處でないと、吾と吾身を起さんとすれば毒酒にでも酔つたやう、身體は宛然海月の如し、岩本君も吃驚して立上り、勘定もソコ〳〵死せるが如き吾輩を其鐵の如き腕に縋らしめ、靜々と段梯子を下るのであつた。

戸外に出ると有繋に涼しい風が吹く、併し自分では暫らく夢中で、ハツト氣か付いて見ると、一種の惡臭の何處からともなく來る支那街の雜閙中を、依然として岩本君にたすけられて居るのが解つた。

辛烈なる支那酒の香と、不潔なる熱帶の空氣に醉ふて、飛んだ厄介を岩本君

に掛けたが、幸にも大事に立至らず、氣が付いて見ると本來の元氣は、螺旋條の捻を戻すが如くに恢復し、騷々しい内にも靜かに更け行く新嘉坡の夜の街を軈て旅館常磐木に歸つて寢た。

翌日になつた、岩本君は佛跡參拜會の用務を帶びて居るから、新嘉坡に止まるべき人でない、朝食を終つて岩本君が歸船せんとするとき、吾輩は熱實に神聖なる事業の成功を祈り、互に手を握つて訣れた。

吾輩は夫れからジョホールに行つた。

ジョホールへは新嘉坡から小蒸汽の便がある。上陸して直ぐ舊ジョホール王の宮殿を見物に行つた。お定りの門番に挨拶して中へ入ると、有繋は王樣の宮居で宏壯美麗、見る人をして驚かしむるものである。

寶物陳列室を見た。故ヴヰクトリヤ女皇の寄送にかゝる黄金製の王冠は、寶玉を鏤めた黄金造りの太刀と共に、燦然として異彩を放つて居る。就中奇異の

感を抱かしめたのは、昔日本の大名行列に用ゐられた羽毛を冠した長槍に似たものがあつたことで、中には猛獸の毛を以て飾られたものもあつたやうだ。

(二) 新嘉坡の醜業婦

日本人の面汚し——發展の先驅者——日本婦人ばかりでない——日本遊廓の起源——誘拐の方法——印度人の高利貸——一人に就き八百圓——鐵石熔る赤道直下——正氣の沙汰とは思はれない

日本の醜業婦といへば世界に鳴響いたもので、甲は是を以て日本人の面汚しだといひ、乙は是を以て邦人發展の先驅者であるといふ。其孰れが眞理であるかは吾人茲に暫らく措て問はないが、實際彼等醜業婦の現狀と見ては、是でも日本帝國に籍を置いてる、日本人の片割れかと殆んど情けなくなるのである。

是等醜業婦が殆んど世界のあらゆる方面に散在して居るのは、今更改めて言ふまでもないが、新嘉坡は其中でも激烈であるやうだ。

吾輩などは新嘉坡があの位の範圍、あの位の人口で、能くも其裏面にあれ程の暗黑界を有したものだと、喫驚した一人である。

此種の暗黑事は殖民地に有勝なこと、寧ろ止むを得ない自然の情勢であつたかも知れないが、夫にしても吾同胞が斯く迄情けなく、斯くまで殘酷に其刧を洒しつゝあるかと思ふと、實に情けなくなるのである。

勿論新嘉坡で醜業を營んで居るもの、單に日本婦人に限つた譯でない、白人でも佛伊英米悉く相應に行つて居る。支那人馬來人は殊に然りで、强ち日本婦人ばかりを責むべきではないが、而も新嘉坡の醜業婦といへば、何人と雖も直ちに日本婦人を聯想する。是は自ら依つて然る所以があるので、吾人は實に日本人の體面上且又世界人道の爲めから言つて、其救濟匡正の途を講ぜざるを得ないのである。

新嘉坡に於ける日本醜業婦發展の歷史は、吾人不幸にして能く知らないが、

吾輩の見る處では、其今日あるは日本の船乘が預つて力があるらしい。

今より數十年前、日本の船乘が此地に漂着して、其殖民地に女性の必要なる所以を看破し、縞かに案を打ち歸來甘言を以て數人の婦女を誘拐し、直ちに渡航して醜業を營ましめて見ると、殖民地の秩序なき人情の常として、恰かも大旱の雲霓を望むが如く、押寄せる白郎黑客、夜毎日毎の枕は數知れず、喃々たる私語低唱、後朝の訣別に片言交りの難有う又來ますが解るやうになつて、需要忽ち嵩じて供給遽かに不足となり、旨く人情の弱點を捉へた事業が當つた本人は大喜び、直ぐ又幾人かを仕入れて、そも突出しの其晩より、宵の緣喜は鼠鳴きの鳴き損なく、吾から求めずとも來る赤髭南京を初めとし、馬來印度の好色漢を手玉に取つて投げても投げても、色樣々の情の綾は解けつ結びつ、赤道直下の宵々、待人の疊算用更に要なく、賣る枕の數に抱主の彈く算盤玉の音は日を追ふて忙しげなり。

斯うなると見やう見眞似の、我利々々亡者共が、吾も吾もと開始めた惡商賣が、抑も今日新嘉坡日本遊廓の盛大をなした基礎となつたのである。で、事業夫自身の性質から、固より人間並の血の通つてる輩の。あづかつて居る筈もないか、現今新嘉坡日本遊廓の樓主と號する奴等は、多くは內地の喰詰者で、其身元を洗つて見ると、裁判官巡査船員等のあがりそれに博徒ゴロ書生等であるやうだ。

九州が醜業婦唯一の輸出地であることは、三歲の童子でも知つてる有名な事實だが、猶且此地方に出稼の醜業婦も、殆んど其全部が九州出身で、長崎天草島原邊の者が多いやうである。

以前は誘拐の口實として種々の甘言を弄したので、無智の婦女はウカと夫に乘つて、新嘉坡三界迄地獄の憂目を見に行くやうになつたのであるが、玆に吾人の不審に堪へないのは、比較的敎育の普及した今日、尙ほ九州地方から惡漢

の甘言に乘つて、誘拐される婦女の絶へないことである。是は慥かに不可思議千萬なことで、過去數十年の間、幾多悲慘の涙を以て書れたる罪惡の歴史は、必ず是等悲慘の子を出したる地方の人々に讀まれて居るに相違ない。然るに今日猶ほ是等地方から婦女誘拐の跡を絶たぬは、吾人の最も不思議とする處である。誘拐者の口實がさまで千變萬化の巧妙を極めて居るとも思はれないとすればどうしても、此地方の婦女は、或程度迄吾から進んで誘拐されるのではあるまいかといふ疑問が起る。而も此疑問が疑問でなくして、多少根底ある事實ではないかと思はれる節もないではない。

長崎を訪れた人は、稲佐のお榮の邸宅が、稲佐の丘上から全市を下瞰して、十萬の甍に有意味の冷笑を浴びせかけて居るのを見たであらう。稲佐のお榮固より新嘉坡の醜業と關係はないが、彼女が西比利亞を横行して、歸來稲佐の丘に斯の如き豪奢を衒ふ所以の者は、慥かに長崎附近に婦女誘拐の盛に行はるゝ

事實の一面を說明するものではあるまいか!

女性は虛榮の最も忠實なる崇拜者である。若し此稲佐のお榮以外に、新嘉坡若くは香港地方で醜業に成功し、寶玉と黃金で其汚れたる臭骸を粉飾し、其土臭い鄕土に歸り來り、純潔無垢なる村娘の虛榮心を刺戟したらどうだらうか。氷雪寒き西比利亞も鐵石熔る赤道直下も、眼前の虛榮に心狂ひたる婦女の前に何の恐るゝ處ぞ。

斯くして九州地方の婦女が、土臭い生活から脫せんとして、恐しい焦熱地獄にと踏込むので、考へ來れば其悲慘なる運命の責任の半ばは、彼等誘拐された婦女が當然受けなければならないのである。

併し中には實際健全なる職業に有付けると思つて來たのも少くないので、是等が異境萬里の地に於て、其鬼の如き樓主に依つて醜業を强らるゝ悲慘の光景は、能く筆舌の盡し得べきことでないのである。

日本遊廓の樓主を親方といふが、是等の親方が醜業婦を仕入れる方法は、實に都合能く出來て居るのである。新嘉坡には印度人の高利貸が澤山居るが、所謂親方共は是から借金して醜業婦を仕入れる。で、其貸借の方法なるものが極めて簡單で、若し一醜業婦を抵當として提供すれば、高利貸は大喜びで六百圓乃至八百圓を貸してくれる。而も其抵當たる醜業婦は自分の手元で營業させるのだから少しも差閊ないのみならず、借金の八百圓位は忽ちの內に消却し盡し尙ほ優に相當の利益を見ることができるのである。

醜業婦に對する樓主の待遇は、世人の想像するが如く殘忍なものではないが唯樓主は一意借金で自家の醜業婦の體を縛することを力めるので、無暗矢鱈に煽動して無益な贅澤をさせる、而も其贅澤は必ず樓主の仲介に依つてするのだから、彼等醜業婦の負擔は日々增すばかりで、目に一丁字なきもの若くは算數の觀念のない輩は、樓主の手加減に依つて何時までも醜業を營ませられる。

併し中には玉帳やうのものを用意し、收支の道を明らかにしてる連中は、幾年かの後には負債の全部を償却し、經營慘澹たる貯蓄で、身に綺羅を飾り得々然と故郷に歸るといふ順序になるのだ。

彼等醜業婦の風俗は、浴衣に赤い兵兒帶をだらし無く卷きつけ、頭髪は蝶々髷に紅い鹿の子などを掛け、足は紺足袋に突掛けの麻裏といふ拵へ、夫で以て軒下に椅子を並べ、通り掛りの支那人馬來人及び白人の水夫などを、喋々喃々と呼掛けて居る。迚も正面に見られる光景ではない、吾輩などは是でも正氣の沙汰かと疑つた位で、世人が是等醜業婦の存在を以て、國辱の大なるものとするのは、强ち無理でないと思つた。

玆に小說のやうな事實がある。醜業婦の事を書た序だから書き添えて置かう

其當時新嘉坡に中野といふ醫者が居た、譚は此人に關してのことなので……。

中野君が日本を出發した動機は吾輩勿論精しく知らないが、當事と何とやら

さて新嘉坡で開業して見るとどうも旨く行かない、そこで遐羅に渡航した。其時の公使が稲垣満次郎君だ。盤谷府で中野君は公使の盡力で開業したが、其處でも業務は全然失敗に歸し、詮方なくなつたので、又も新嘉坡へと逆戻りをした。併し此時は最早再び醫者をする勇氣も失せ、其隱藝の三味線と舞踏を以て旨く遊廓の樓主に接近し、其お蔭で幇間同樣遊廓に出入して居た。

前に述べた通り、新嘉坡の日本醜業婦なるものは、悉く其前身が九州地方の農夫の娘かさなくば、炭坑附近の石炭擔ぎであるために、遊藝の嗜みのあるものとては殆んと絶無の姿であるから、幸にも中野君の未熟の藝當が、日本遊廓中に非常に持囃され、夫が動機で一個の醜業婦が、深く中野君を戀するに至つた。一方中野君と雖も木石でない以上遂に其戀を成立せざるを得ないので、夫からといふもの兩個は最も深き相思の間柄となつた。

處が其醜業婦中々の女丈夫で、其貯財の全部と日々の稼高を惜氣もなく中野

君に提供し、同君をして遺憾なく醫業の經營費に充てしめたのである。斯うなれば中野君と雖も一生懸命とならざるを得ないので、疲弊せる勇氣を揮ひ起し幇間時代に受けたる愛顧を緣に、遊廓全部を重なる顧客として、鋭意熱心、仆れて後止むの覺悟でやつたものだから、暫く間に好評を博し、其當時既に其愛人を迎へて樂しい家庭を形造つて居られた。

秩序なき殖民地では妙な動機から成功する人がある、此中野君の如きは實に其好模型であるのだ。

(三) 甲板客の自然主義

瓜哇島ソラバヤに向ふ——甲板客の生活狀態——何でもカレー粉だ——五本の指が箸の代用——嚴重なる男女關係——亭主の隙を狙つて——馬來人の姦通騷ぎ——困つたのは船長——喧嘩が始まつた

英國汽船のメイフラワー號で、新嘉坡出港瓜哇島ソラバヤに直航した。

此メイフラワー號は新嘉坡に於ける英商サミユール商會の持船で、新嘉坡ソラバヤ間の定期航海船であつたのだ。で、吾輩は此船に便乘する迄に隨分苦心もした、運動もしたが、結局サミユール支配人の好意で、ソラバヤ迄の無賃乘船を許されたのである。處で船長も運轉士も事務長も英人氣質の、殖民地附近の航海に從事する船員中には珍しい好紳士で中にも船長の如きは渺たる一船員から仕上げたといふにも係らず、立派な人格を揃えた愉快な老人であつたのみならず、殊に吾輩の爲めには非常に斡旋の勞を取られた一個の恩人である。

メイフラワー號が新嘉坡を纜を解いたのが午前六時、靜かに明けた熱帶の曉色に、恰かも夢の如く浮んだ港内碇泊の船舶、さては陸上の白堊赤壁、綠の濃い耶子樹の林影が、揚錨機の廻轉する音に連れて、拭つたやうに明晰としてくる。前甲板に立つて揚錨信號をして居た一等運轉士が、小旗を捲きながら其豚のやうに肥つた圖體を、歩むといふよりは寧ろ轉ぶやうにして船橋の方

に戻つてくると、船は最う微速力で浮標からは餘程離れて、舳は無論港外を眞一文字に指して居た。

半速、全速、メイフラワー號は最早新嘉坡を全く後に見て、是より鱶てリオ海峽に入らんとするのであつた。

處が茲に是非説明して置かなければならないことがある、といふのは外でもない、日本の汽船などには無論ないが、甲板船客のことであるのだ。

甲板船客は讀んで字の如く、航海中上甲板に寢起きする船客のことなのだ。人も知る如く新嘉坡瓜哇間の航海では、船客といへば殆んど其全部が支那人と馬來人である、即ち人間としては餘り上等な代物でないので、固より熱帶附近であるからでもあらうが、彼等支那人馬來人には甲板客が恰度相當して居る。

といふのは、強ち吾輩の惡口ばかりではないのである。

航海中に於ける甲板船客の生活狀態が、吾人には又頗る珍なので、彼等は

乘船するとき一切の副食物を携帶する、即ち船中では飯だけ炊いて貰つて、其他は悉く自炊であるのだ。で、此邊を航海する汽船は甲板船客を收容するに、必要なる設備がしてあつて、上甲板前部の隅の方には、火爐がある、流しがある、其他一切の炊事設備が整つて居るから、例の甲板船客は是に依つて自由に食事の用意をすることができる。

彼等の用ゆる食事には一個の特色がある、外でもない、カレー粉を猛烈に使用することである。從つて彼等がライスカレーを好むこと夥しい、日本人なら鼻の柱が曲つて、兩眼からはありたけの涙が出盡くすやうな辛烈いのでなければ駄目で、而も夫が料理といふ料理に入らぬものはないといふに至つては實に驚かざるを得ないのである。

甲板船客は下級の勞働者ばかりだらうと思つたが、強ちさうばかりでもないさうで、中には馬來マストラ邊の富豪も混ざつて居て、例の自炊でカレーの料

理を盛に賞翫して居るといふことだ。

日本人が二本の箸を以て食事するのは、食事の方法中最も進歩したものである。能く聞く話だが、西洋人のフォークは指食即ち摘喰の遺習で、彼等が慥かに吾神州男兒より下等の人間であつた證據であるといふが、或はさうかも知れないので、今日文明の程度の低い馬來人や印度人が、盛んに指食する處を見ると、彼等の食事の方法が一段と進歩した處で、二本の箸を使用するといふことより、現在採用し來つた指食の方法に能く似て、而も彼等のためにはハイカラである、ナイフやフォークの使用に思到るのが順序で、西洋人なども以前屹度是等未開の民がやりつゝある無作法な、日本ではお行儀の惡い下婢しかやらない（尤も故津田仙翁は下婢の目を盜んで摘喰するのが唯一の道樂であつたといふが）摘喰の方法を用ゐて居たに相違ない。

思はず話が飛んだ方へ外れたが、メイフラワー號の甲板に於ける馬來人が

で、五本の指で切りにバク付いて居る。而も指の捌きが鮮かで、あれなら指でやつても差閊はあるまいと思はるゝ程巧みなものだ。

馬來人は大抵マホメット教の信者であるといふが、夫かあらぬか、甲板船客の馬來人共は落日に對し、何か呪文を唱へながら、切りに額に手を當てゝ禮拜をして居る。吾輩は始め日沒時に於てのみ、禮拜だと思つたが、さうでない、夜が明けて地平線上の波を破つて上る、團々たる朝暾に對し一生懸命で祈念を凝らして居る。傍で見て居ると夫が何とも言へない程滑稽だ。

男女七歳にして席を同うせずといふのは支那の教訓だが、此馬來人間に於ける男女の區別は、是に劣らぬ嚴格なもので、席を同うする處か話でもしやうものなら夫こそ大變、殊に他人の妻妾と語を交しでもすると、夫が直ちに姦通したことになるので、日本の男女關係などゝ比較すると、實に苛酷極まるものである。這麽嚴重な慣習がある處だから、日本の自然主義者などは一日も棲息す

ることのできない國だが、其點は能くしたもので、中には隨分自然主義を奉ずる奴もあるやである。

夫で一日船中に這麽珍事が持上つた。同じ甲板船客の中でも獨身者と夫婦者とは、其間に嚴重なる無形の區別が立てゝあつて、一見頗る四角八面に構へて居た迄は能かつたが、船がバンカ海峽を南下する時であつた、一個の青春い獨身者が他人の妻君に向つて、甚だ怪しかる擧動に及んだそうだ。珍事といふのは夫が爲めに起つたことなので、件の獨身の青年は新嘉坡でメーフラワー號に乘込むと同時に、其妻君を垣間見に人知れず思を燃して居たので、折もあらばと只管其の妻君の御亭の隙を覗つて居たが、折も折とて船が薄暮バンカ海峽に入ると、軈て日が暮れる、其の亭主も何か炊事の用に取紛れて、妻君を薄暗い宵闇の甲板に殘して置いた。スルト恰度猫が鼠を狙つたやうな態度で居た青年は、機逸すべからずとでも思つたのか、突然其妻君に近づいて口説き蒐つたの

だ。處が其妻君も無頓着だ、顏世が例の吾夫ならで褄な重ねそで斷然と、師直を刎ねつけたやうにやればよかつたのを、如何なる理由か、夫とも落花心ある流水何ぞ情なからんとでも思つたのか、兎にも角にも强硬な態度を取らなかつたため、遂に其夫のために甚た面白からん處を發見さるゝに立至つたのは是非もない話である。

重ねて四つにするは日本の故事、能く能く穩健に落着しても姦通科としての七兩二分は、古往今來動かぬ相場であるにも係らず、其又亭主が妻君に劣らぬ無頓着な男で、現在馬來の習慣で立派に姦通と認むべき仕打をされながら、大喝一聲姦夫の膽を寒からしむるの勇氣もなく、さりとて道念頗る薄弱なる己が妻に向つて、一言其不都合を咎むるでもなく、唯殘念さうに泣面をしながら兎角の思案に暮る體態、あわれにも又馬鹿々々しい男であると思つてると、驀て其男は船長室に行つて船長を引張つてきた。

姦通騷ぎに船長が立會するのも妙だが、引張つてこられた船長は、那麼ことは少しも知らないので、一體どうしたのですと訊いて見ると、驚くまいことか女房を取られた悔しまぎれに自分で姦夫に鐵拳の一つも加へる勇氣はなくて、御苦勞にも其理否黑白を裁判せんために引張り出されたのであつた。

船長は如何にも困つたといふ顏付、而も那麼ことは一向懸念なしでベラ〳〵多辯つて居た男は、急に手を振り眼を怒らして連りと船長に姦夫の處分を迫るのであつた。

船長は災難、航海中船橋に於ける氣苦勞を、今し船長室の安樂椅子に休めんとすれば、思にもかない姦通騷ぎの裁判に立たせられ、其潮風に吹かれてライオナイズされた顏に、愛嬌ある微笑を純白の鬚髯の間から見せて、

「夫は誠にお氣毒の譯だが、船長はどうも他人の妻君の世話まで燒く暇がないので、君が當然監督すべき妻君に不都合があつたならば、夫たるものゝ威嚴

を保つ必要上、君自身で斷乎たる處置を取られたらよからう。船長は這麼事件に立會する職權がないので、例令また好意的に姦夫姦婦に忠告したところが、夫は恐らく徒勞な話で到底利目も何もあつたものであるまいから、船長は是で御免を免る。」と傍の事務長を顧み哄然大笑して、嬲て闇の中を船尾の方に其靴音と共に消えてしまつた。

此一言が非常に其男をエキサイトしたと見え、上甲板の薄暗い燈光にすかして姦夫を求むる樣子であつたが、恰度前甲板の下に事態如何にと見て居た青年を發見すると同時に、一種の奇聲を發しながら突如として飛掛つた。

此處で大喧嘩が始まつた。併し其喧嘩といつても不得要領なもので、雲突く計りの印度人の水夫が、組付いた兩個を引分けると、難なく夫で喧嘩は中止されてしまつた。

彼等は實に詮方のない國民だ。吾輩は其滑稽を笑はんより寧ろ彼等を憐れむ

の情に堪えなかつた。

(四) 赤道通過

南航十時間——赤道祭——海員間の迷信——日本軍艦の赤道祭——滑稽なる餘興演藝——印度人の水夫——不思議——不思議————舵機故障——マウントカラン——リオンスの古跡

話は前に戻る、メイフラワー號は新嘉坡を出港後、リオ海峽を拔けリンガ島の東方を過ぎ、南下十時間、東經百〇五度五分の地に於て赤道を通過して南緯の海に入つた。

船が赤道を通過するときは、必ず赤道祭を行ひ、赤道神を祀り、船員に一日の休暇を與へ、愉快に其一日を過さしむる習慣になつて居る。

茲で赤道祭のことを述べる積であつたが、吾輩は前後六閲年の間に幾度も赤道を通過したので、此後の赤道通過の際に愉快なる赤道祭を記述することゝし

て、其代り毎年の遠洋航海で日本の練習艦が通過する赤道だから、一つ帝國軍艦の赤道祭のことを話さう。

元來赤道祭の起因は往古の帆船が赤道を通過するとき、赤道無風帶の中に飛込み、二進も三進も行かないやうにならないために、赤道附近を支配し居らるゝ赤道神を厚く祀るに始まつたもので、此赤道祭の爲めに赤道神の御機嫌も害ねず、無事赤道が通過されたのであつたのだ。

由來海員間には迷信の多いもので、往昔の帆走船員は慥かに一種の迷信から赤道祭を行つて熱心に赤道通過を祈つたものであるが、現今蒸汽船で依然として赤道祭を行るのは、此の機を利用して赤道直下に於ける航海の勞を慰めんための一個の手段で、往昔は恭しく赤道神を祀つたものが、日本の軍艦で行る赤道祭などでは、赤道神が態々天下つて軍艦を歡迎するといふ仕組にまで變つて居る。

赤道通過の二三日前、赤道神は必ず歡迎狀を軍艦に送つて來る。主賓は軍艦ならば艦長、艦隊ならば司令官で、愈々赤道通過の當日、赤道通過數分前に甲冑に身を固め、長槍を携へた赤道神が、數多の臣下を從へ威風凛然四邊を拂つて前甲板に天下るのである。で、此赤道神が艦長なり司令官なりを導いて、前甲板に劃せられたる假想の赤道を渡り終ると夫で儀式が濟むので、此刹那に艦も實際の赤道を通過し、艦首愈々南緯の波を破る時であるのだ。

赤道通過の儀式が濟むと。赤道神主催の艦隊(若くは軍艦)歡迎會が開かれる。其餘興として赤道神部下の演藝が始まるといふ順序だ。

茲で赤道神なるものゝ身元を調べて見ると、艦隊中で最も多く赤道を通過した老准士官若くは老兵曹で、其部下なるものが艦中撰抜の藝人である。かつぼれ手踊、さては落語講談浪花節など、四角八面の艦内生活の中に、何時覺えたか素人離れのした藝當に、遠來の珍客をアッといはせる趣向で、此餘興がヤン

ヤの喝采で終りを告げると、這度は軍艦の方で日本古來の武術を赤道神に見せるといふので、擊劍柔道などか上甲板で始まる、赤道神も是を見て、日東帝國が常に國運隆々たるは、誠に偶然に非ずなどゝ感心する。そこで最後が例の樂隊に連れて賑かな假裝行列が始まる。是で散々腹の皮を捻つて赤道祭が茲に目出度終るのであると、是は吾輩が新嘉坡で例の回航の途にあつた三笠を訪れた時、何かの話の序に乘組士官から聞いた實話である。

是も恰度其時聞いた話で、老兵曹などが若い水兵を捉へ、赤道とは大海中に劃せられたる大朱線の事なりと號し、巧みに朱線を畫きたる双眼鏡を貸し與へどうだ赤道が見えるだらうなど、揶揄すると聞いて居たから、吾輩も無聊の餘り是で以て黑奴の水夫を弄んでやらうと、人の好い一等運轉士に双眼鏡を借り海圖室用の繪具で赤線を横に引き、何氣なき風を裝ふて上甲板に出た。

メイフラワー號も赤道祭で、當直の外の水夫は休んで居る。中に一個の若い

印度の水夫が、まだ航海に慣れぬ故か、欄干に凭れて何事をか深い思に耽るかの如くであつたので、人が惡いやうだが懷鄕病にでも罹つて居れば、是も時に取つての憂晴の良法だと、其儘近づいて後から肩を叩いて、

「何を那麼に考込んで居るか？」と英語で訊くと、件の水夫は吃驚して振返り呆氣に取られ無言で居る。

「どうだい英語が解るか。」と問ふて見ると

「解ります。」といふ。

「懷鄕病に罹つて居るのではないか。」といつて笑つてやると、きまり惡さうに先方も笑つて

「否」

「初航海か。」

「エイ然うです。」

「船乘は辛からう。」
「まだ慣れませんから……」
「さうだらう……併し辛抱するがいゝ」
「難有う。」
「どうだい新嘉坡には待つてるものがあるだらう？」
「親達ですか。」
「さうではないよ。」
「兄弟？」
「お前の情人……！？」
「ハ、、、、、」と笑つて
「那麼者はありません。」と逃げ出しかけたので、逃げられては大變、折角仕組んだ芝居がおじやんになるから、後から呼止めて

「お前は赤道を見たことがあるか。」と訊ねと見ると、怪訝な顔をして
「赤道？また見たことはありません。」といふ。
「夫では見せて遣るが、赤道は英語で日本語では赤線といふ意味だから、緯度零度の處には眞赤な線が引いてある。尤も肉眼では見えないが此双眼鏡で見ると解る。見て御覽！」といつて渡すと、彼は一寸眼に當てゝ見て
「不思議！不思議！赤い線が見えます。」と雀躍し獨りで喜んで居る。
「どうだい、能く見えるだらう。」
「エイ。」と切りに双眼鏡に見入つて夢中だ。
「最うよからう。」といつて取返すと、不思議な夢からでも醒めたやうに、唯眼の球を丸くして、赤道直下の睡つたやうな海を見つめて居た。
此水夫は非常に正しい英語を話すから、多少物の道理が解るかと思つたら、案外さうでもない、印度人が最少し悧巧にならない限りは、英國はまだ當分印

度に對して安心して居ても關はない。

赤道直下は大抵無風である。日本の夏でも風がなかつたら如何に苦しいであらう、況して酷烈の本家本元たる赤道直下で、ソヨとの風もないのだから、全く堪つたものでない。ジワ〳〵と壓搾器にでもかけて搾らるゝやうに汗が出るといつて行水が出來る譯のものでない、人々は大海の蒸熱に醉ふて、滿船殆んど生色なき慘狀を呈する。思へ！　此時船底の汽罐室で焚火に從事する火夫の身を、焦熱地獄とは正に是をいふのであらう。

舵輪の音や機關の響きが死んだやうに靜かで、鐵の船體が今しも熔けんとする時、天の一角、一抹の雨雲現はれるよと見る間に、大海の寄すが如く、魔物の襲ふが如く、空一面墨を流したやうに黑ずんでくると、早や大粒の雨がビシヤリ甲板に碎けるおどろ〳〵しさ、ソラ雨だといふ間もあらせず、百千の大銀河を逆かさまに注ぐが如き沛然たる驟雨に、平素清潔の何物たるを知らぬ甲板

船客の馬來人支那人はイザ知らず、苟くも汗と暑さの厭ふべきを知つてる人々は、好機逸すべからずと、要所々々に裸體の身を猛雨の中にさらけだし石鹼と手拭で滿身の汗と油を洗ひ落すので、是をなぞらへて文覺那智の荒行は穿つた語である。で、恰度洗終つた頃にはさしも猛烈に降つた雨も、カラリと晴れて又元の太陽が、頭の直ぐ上から熱鐵でも押付けるやうに照りつけるのである。是が赤道直下の航海中、船員に最も喜ばれる驟雨の行水であるのだ。

是から前に話した姦通事件の持上つたバンカ海峽に入るのだ。

バンカ海峽はスマトラ島とバンカ島との間で、海峽の入口から出口までは全長百廿哩程ある。此海峽を南下しつゝスマトラ側の海岸を望むだが、此海岸が又頗る奇態で、一面の卑濕地である處へ、例の熱帶植物のマングローブ樹が海中にまで生ひ茂つて居るので、海面などは夫が爲めに暗濁色に變じ、宛然大河の氾濫した如き有樣で、吾人に取つては實に目新しい光景であつた。

バンカ海峽を通過し終ると、行手からコムモドール、ウエルデンの率ゆる蘭國殖民地艦隊中のゼーランド。コニンジレンゼント。アトラクト。ヌーバラバンドの諸艦が、列序を正し堂々として北上するに會した。多分新嘉坡にでも行くのであらう。

メイフラワー號は蘭國艦隊を船尾に見失ひ、是より針路を折つてソラバヤに向はんとしたが、急に空模樣が惡くなり、船は猛雨暴風怒濤の三面攻擊を受け、剩つさへ舵機に故障を生じ、見る見る內に南へ南へと流され、船長は一時バタビヤに入港せんとしたが、夫さへ操縱困難のために、目的を遂することができず、波のまに〳〵漂流すること約三時間、漸く雨と風が收まつた頃には、船はスマトラの南端と爪哇の西端とを左右船首に見て、今しスンダ海峽に入らんとするところであつた。と見ると右の方には魏々乎としてラジャバカ山峙ち左の方爪哇側には中天雲を摩すマウントカラン嶄立し、其山麓が綠の裳裾を長

く曳いて、美しい裾模樣を惜氣もなく海に濡して居る邊、暮靄幽かに罩めて、メラック岬が宛然夢のやうに南に延びて居る。

此に於てか一千八百十一年、英國が印度洋中の蘭領諸島を侵略した時、英軍の一少壯士官レフテナンド、リョンスが、僅々卅四名の手兵を提げ、夜闇竊かにメラック砲臺下に上陸し、一小隊にも足らない部下に、「第何中隊進め」の號令を下して、守兵の度膽を奪うと、さなきだに不意を喰つた處だから、空しくリョンスの大風呂敷に捲き立てられ、富士川の平軍宜しく倉皇守を捨てゝ遁逃した。此態を見て竊かに赤い舌を出したのはリョンスだ、天來の機智で旨く砲臺を乘取り、當時の英人をして思ひさま其奇功を謳歌せしめた痛快事を思起さずには居られなかつた。

舵機の故障は修理された。メイフラワー號は未だ躍り狂ふ怒濤を乘り切り、舵輪一轉船脚は刻一刻と北に延びる。靜かな夕暮で見るともなくメラック岬

を望めば、百年前の快男子リョンス其人を眼前見るやうで、勇躍自ら禁ずることができなかつた。

暮色蒼然として雲山漠々、メイフラワー號は是よりスンダ海峽を北上し、バタビヤを南に見て夫よりソラバヤに向つたのである。

(五) 家庭の大慘事

最愛の妻を見んとする加藤君——經綸たる情緒——ソラバヤ入港——恒利なる支那旅館——土産物を山ほど積んで——人間の至情——妻君の行衛不明——意外の新事實——掌中の玉を拔かれた加藤君——恐むべき不義漢——謝罪金二百圓——詫證文一札

今迄書くことを忘れて居たが、メイフラワー號に於ける日本人船客は吾輩一人でなかつたので、外に熊本の人で加藤某といふのが乘合して居たのだ。元來加藤君は這度初めて爪哇に渡航するのではないさうで、段々其談話を聞

いて見ると、今迄ソラバヤに商業を經營して居たが、何かの都合で一旦歸國することになり、此の航海は恰度故郷の用務を果し、再び爪哇に渡航せんとするのであつたさうで、加藤君は其ソラバヤに殘した最愛の妻君の事を、吾輩への語り草に、おのろけを初めたので、吾輩は其時熟々さう思つた。加藤君は其糟糠の妻女に對し非常に親切なる夫である。と同時に夫を故山に見送つて、遠く異域に孤閨を守りつゝある妻君は、如何に其良人に對し忠實なる妻女であらうかと、實際又加藤君は久しく相見ざる妻君の顏を見るのが、唯一の樂しみであるとまで切言されたから推しても、其兩者間の情緒が如何に濃厚で如何に纏綿たるものがあるかは、木强吾輩の如きでさへ容易には推理することができたのである。

航海數日メイフラワー號は無事ソラバヤに入港した。で、加藤君の案内で上陸して一應支那人の旅館に止宿ることにした。

一口に支那人旅館といつても一から十までであるが、其上等なのになると中々堂々たるもので、和蘭人の經營になる旅館などは、其上等と稱するものでさへ支那旅館の中等にも及ばない位である。夫で非常に安値だから驚く、食事は支那料理だがお誂で西洋料理は何でも出來る。吾輩の入つた旅館が一日一圓の宿料で、斯の如く安値なるにも係らず非常に立派な家で、一寸最初は面喰つた程であつた。元來此地方に於ける支那人の勢力は大したもので、五百年來彼等の執拗な精力で築き來つた根底は、最早何等の威力を以てしても動かすことができない、從つて商業の中心は支那人で、旅館なども自然地主の和蘭人そつちのけといふやうな設備もするのだ。

翌日加藤君は日本からの土産物を山ほど車に積んで妻君の許へ出掛けた。旅館を出る時の顏色には喜悅の情が溢れて、聞くからに冴へた調子で何彼と話しながら出て行つた後影を見て、あゝ是が人間の至情で又實に人生の快事である

と、思はず不覺の溜息を吐いたのである。

吾輩は旅館の一室に身を横へ、地圖を案じ爪哇島探檢の順序などを考へて居ると、ものゝ三時間も經つたと思ふ頃、先刻妻君の許に行つて今や相擁して樂しい再會を喜んで居る筈と思つた加藤君が、悄然たる面持で心靈しの土産物と共に歸つてきた。見れば顏色も能くない、地へ難い怒氣でも含んでるのか、兩眼は何だか血走つたやうで頗る物凄い、どうした譯かと訊いても默して一語も語らない、兩腕を堅く拱いて深い思に沈み時々溜息を吐いて居る有樣が如何にも變だ。何しろ觀樂の甘漿に醉ふべき人が、此有樣だから驚かざるを得ない、暫く經つと何と思つたのか、急に給仕を呼んでウヰスキーを求め、そいつを盛に仰飲りながら、僅かに胸中悶々の情を漏して居るやうだ。

加藤君は何の爲めに歸來早々斯の如く激昂し、斯の如く煩悶したか、此事は定非共讀者諸君に語らねばならぬ、實は斯ういふ譯なのである。

加藤君は口の惡い奴にいはせると所謂サイノロジストの最たるもので、吾輩も船中では隨分甘つたるいことを聞かされた。併し是が永く海外に在留する人の長所であり又短所であるので、一概に甘い男とのみ言はれない事情があるのだが、兎に角加藤君が一方ならぬ妻君孝行主義の人であつたゞけ、次に語らんとする悲慘事に對しては、切實に同情を寄せなければならないのである。

其悲慘事とは何ぞ、是れ吾輩が須らく聲を大きくして語らんとする問題である。希望の光りに輝いたまなざし、歡樂の情の溢れたやうな面持ちで、加藤君は一刻も早くと大急ぎで妻君の許に駈込むと、あはれや目指す妻君藻脱けの空で、其行先が皆目知れず、誰に訊ねて見ても、彼に問ふて見ても、宛然雲を掴むやうな挨拶で、加藤君は面喰つたといふより、寧ろ一時は途方に暮れてしまつたのである。此時だ、旅館へ落膽して歸つて來たのは。加藤君夫からといふもの、殆んど寢食を忘れて、最愛の妻の行衛を探して歩いた。處が計らず茲に

意外なる新事實が發見されたのである。

意外なる新事實、然り意外なる新事實であつた。是を語るに先ちて、吾人は茲にソラバヤに在留する、農商務省派遣の商業練習生の腐敗を絶叫しなければならない。既に新嘉坡でも此種の醜聞を幾度か耳にした。實際をいふと彼等練習生其者は、決して最初から惡いのではないので、農商務省から派遣され殖民地の腐敗した居留民の中に投ぜらるゝと、忽ち其の惡風に感染し其位置と便宜とを惡用し、吾から醜事の魁をするやうになるのである。で、彼等は自己正當の職務は放棄して少しも顧みず、酒を飲む、賭博に耽る、醜業婦を弄ぶ、此三陀羅煩腦の爲めにのみ彼等が政府の祿を食んで居るとしたならば、吾人は大聲疾呼して其罪を天下に鳴らさなければなるまい。而も單に新嘉坡とソラバヤばかりでない。世界到る處、商業練習生のある處、比々皆然らざるなき有樣で、吾人が一肩痛恨に堪へないのは、時と場合に依り彼等を監督する領事館の連中

の評判までが餘り能くないことである。

然らば商業練習生の腐敗と、前記加藤君の家庭に起つた悲慘事とは、抑も如何なる關係があるか？

雲山萬里、其最愛の妻を慕うて來た加藤君は、後藤なる商業練習生の爲めに其掌中の玉を奪はれてしまつたので、君がソラバヤに着して三日目、彼等姦夫姦婦が相携へて某旅館に潜伏し、醜行を續けて居ることが判明した時は、加藤君は無念の涙ハラ〳〵とこぼし男泣きに泣いたのである。

酒を飲み、賭博に耽り、醜業婦を弄んで尙ほ飽かざる彼後藤遂に他人の妻をまで姦するに立至つたのだ。是が醜事でなからうか、是が腐敗事でなからうか。

加藤君は曩にメイフレラワー號に起つた馬來人の姦通騒動を目擊して、其夫の意氣地のないのを笑つた人である。而も船中喜劇の主人公を嘲つた加藤君が

ソラバヤに來て同じやうな悲劇の主人公にならうとは、何と奇妙な因緣ではあるまいか。

加藤君は斯ういつた。相手が田夫野人なら自分は敢て意としない、併しながら苟も教育あり又多少の道念がある筈の商業練習生が、自分の天國たる家庭を破壞したのだから、斷然此儘で引下ることはできない！

處で吾輩だが何だか這度は、瓜哇へ姦通の悲劇でも見に來たやうな氣持がしたので、自ら苦笑を禁じ得なかつたが、一方加藤君の强硬なる態度と手段とで漸く事態が困難の度を增してきた。所謂風雲急で局面の發展が果してどうなるかは、數の少い在留民間の毎日の話題であつたのだ。

然るに此時一個の豪傑が現はれた、是なん南洋探檢家として、一時江湖に其名を知られた副島八十六君であつたのだ。當時八十六副島君はソラバヤに滯在して居たが、奇妙な境遇から思にもつかない姦通の仲裁に立つやうになつたの

で、副島君としては頗る迷惑であつたかも知れないが、併し盛名能く此人事の難問題を解決し左つたのは、誠に快男子の快男子たる所以で、吾輩も此點に就ては竊かに敬意を表して居る一人である。

後に至り道路報ずる處を聞くと、姦夫後藤は謝罪金二百圓に詫證文一札を添えて加藤君に提供し、漸く大事に立至らずして落着したとのことである。

(六) 南洋探檢家副島八十六君

愉快な豪傑——爾の採取——瓜哇深林の探檢——一葉の秘密地圖——南洋を舞臺としての活動——スマラン市に向ふ——ジョクジャ市藩酋長を訪ふ——双肌脱ぎの王樣——黄金造りの短劍——更紗と藍の話

現今でもさうであらうが、其當時ソラバヤに居た日本人としては極く少數なもので、重立つたものでは豪傑副島八十六君を筆頭とし、齒科醫の柴川君、三井物産會社の林君、加之商業練習生其他を加へて、漸く十人足らず位ひなもので

あつた。其中でも柴川副島の兩君が、熱實なる同情を寄せられたのは感謝すべきである。殊に副島君には南洋探檢家の盛名を慕うて、幾度も面識の光榮を有したので、其都度瓜哇談を聞いて大に參考となつたことがある。

人物を月旦する譯ではないが、副島君は實際愉快な面白い豪傑で、其座談には君の面目が躍如として現はれて居る。吾輩茲に其二三を紹介しやう。

「僕は大隈伯から依頼されて、熱帶の壯觀たる蘭の採取に出掛ける意だ。」と號して立派なクロース金文字入りの洋書を持出し、

「見玉へ、是が蘭の種類だ、是等は總て瓜哇の深山幽谷でなければ發見されないので、僕は不日其探檢に上るのである。」と其探檢の準備として、救急藥品數十種、獨逸式十二連發の短銃一挺、其他何から何まで痒い處へ手の屆くやうな仕度を示された。

「僕は時々軍事探偵と誤まられて困つたことがあつた。」と、成程さうかも知れ

ない、副島君の名刺といふのが、長さ五寸幅員二寸五分もある堂々たるもので其面には法性寺の關白も三舍を避くるばかりの長い肩書が麗々と並べてある。

夫から鞄の中から勿體らしく取出した品がある。何かと思ふと一葉の地圖だ大きさは美濃紙二枚續き位

「是はね大きい聲では言はれないが、聊か軍事的の意味があるので、非常に重要な品だから、他人が來たら必ず隱して呉玉へ。」と聲を低くして注意する態度が如何にも物々しい。恰度其處へ訪客があつたので、周章て疊んでしまつたので、不幸にも其重要なる軍用地圖を拜見することができなかつたのは殘念であつた。此時さう思つた、副島君は豪傑なるかなと。

「僕は大阪の某製糖會社から依頼されて、是から瓜哇に於ける糖業を、研究視察しなければならない。」と頗る得意であつた。成程是だけは事實かも知れないといふのは嘗つて日本で副島君が、一時南洋から歸つて來て大にもてた話を

聞いたことがあり、又朝野の名士の間に主賓として撮影した寫眞などが、恰度面前にあつたので、大阪の製糖會社が多額の旅費を拂つて、其視察を依頼する位の事はあつたかも知れないと、竊に其幸運を羨むの情に堪えなかつた。

「僕は瓜哇に雜貨店を開き、南洋を舞臺として大に活動する意だ。」と、吾輩はまだ副島君を豪傑だと思つて居たから、此話を聞くと同時に其事の必ず成功しないことを、吾と吾身に豫言して置たが、不幸にして僕の豫言は適中した。副島君は何處までも豪傑でなければならぬ、五寸の名刺を振廻し、美濃紙二枚續きの秘密地圖を持歩いて、天下の忠者共を嚇しつける豪傑であらねばならぬ。

他人の棚落しでもあるまいから、一つソラバヤの講釋をしやう。

瓜哇の首府は現今でこそバタビヤだが、近き將來にソラバヤが屹度其の株を奪うであらう。夫も其筈で單に市街としてならば、ソラバヤは瓜哇第二の大都會で、人口約卅萬と號して居る。併し其大部分が支那人だとは驚かざるを得

ない。

市街は歐風の設計で建築物も從つて歐洲風だが、猶且和蘭趣味が歴然として其外觀に現はれて居るのは爭はれないものだ。で、前に述べた通り、支那人は此地で既に五百年の歴史を有して居るので、中には堂々たる支那風の建築物が、白堊赤壁の洋館中に異彩を放つて居るのがあるやうだ。

ソラバヤも飽きたので、此處から汽車で三時間、瓜哇島を南北に横ぎつて、北海岸のスマラン市に出やうと思立つた。ソコで例の通り無賃乘車の談判に停車場に行つた。驛長に會つて早速話して見ると、愉快だ、宜しい、承知したといふので、柴川副島加藤などの諸君に暇乞して、翌日の朝、汽車でスマラン市に下車した。

人口約廿萬の中で支那人が十分の八を占めて居る。從つて支那人の勢力は非常なものである、瓜哇に於ける和蘭人は總體に意氣地がないが、スマランでは

殊に其傾向がある。蘭人で支那人と競爭するやうなのは藥にしたくもないので大抵は支那人の使用人となつてるやうな有樣である。

スマランの支那街には、瓜哇全島で有名な支那富豪が多い。

スマラン市から汽車で二時間ばかりで、ジョクジャといふ處に着く。

ジョクジャは瓜哇島の舊總酋長が建設した舊都で、此地には舊酋長の親族が澤山居る。で、現今は和蘭政府から王族の待遇を受け、何不自由なく其日を送つて行くのである。

吾輩は此王族の一人を訪問した。行つて見ると堂々たる門構の邸宅だ。一寸支那風の建築に似た處がある。上半裸體で腰卷きをして門番に名刺を出すと、受取つた儘スタ〳〵と奥の方へ逃込んだ、是は聊か妙だと思つて居る處へ、門番先生一個の同じやうな風をした男を提して來て、何だか解らないことを辯繰りながら切に吾輩を指して居る。

「御用向きは？」と非常に流暢なる英語で、門番に連れて來られた男が問ふた後で此男は倫敦に永く居たことが知れたが、何樣此爪哇で珍しい綺麗な英語を聞くものかなと、急に味方でも一人殖えたやうな心持がしてきた。

「實は王族殿下に拜謁が願いたいので……」といつて其男の顏色を覗くと、

「何國の方なのですか。」と底氣味の惡い眼光が異樣に輝く。

「極く近隣の日本から參りましたので……」

「左樣ですか、然らば一寸お待ちを願ひたい、只今御諚を承つて參りますから、併し兎に角此方へ。」と其男は急に安心して吾輩を應接室に案內した。

待つこと卅分、是が王族であらう、臣下の肩に倚つて入り來つた老翁がある見ると上半裸體、腰卷は爪哇風の本更紗、勿論絹製で見事な極彩色が施してある、而も跳足で腰間には短劍を帶びて居る。大きさは日本の海軍士官用位なもの、一體爪哇の土人で身分の高いものは、今でも帶劍する習慣になつて居るの

で、刀身にも鞘にも彫刻がしてある頗る美術的のものだが、實際は及がなくて大根も斬れかぬる底のものださうな。

恭しく起立して敬意を表すると、果して是が王族殿下なので、通辯を介して左の御諚を賜つた。

「日本人には始めて面會するが、乃公は豫々日本帝國は慕うて居ました。聞けば非常な文明國ださうで、殊に其軍備の整頓してる點では、歐洲の列强も及ぶ國がないとか、乃公も日清戰爭及び北清事變で、貴國の軍人が聯合軍中で最も勇敢であつたと聞いて心竊かに敬服して居ました。で、乃公は今日其日本人たる貴下の來訪に遇うて、喜悅の情に堪えないと同時に、又貴下の壯擧に對し滿腔の敬意を表し、尙將來の成功を祈ります。」と語り終つて熱實なる握手を求められたので、吾輩も厚く其好意を感謝し、辭して王族の邸宅を辭し去つた。

和蘭政府は舊酋長及其一族を嚴重に監督して居るので、本來酋長の一族に面會するには、和蘭政廳の許可を經なければならないので、酋長にも面會して見やうと思つたが、其めんどうな手續の時間を要する爲めに終に見合せしまつた。

今より約一世紀程前に、英國が印度洋上に於ける蘭領殖民地セイロン島と英領爪哇と取替へ大ひに外交の失敗を來たし英國民は當局者の愚案を非難する今日であるから夫が爲めに和蘭政府は爪哇島に入つて來る英人に對し、嚴重なる注意を拂つて居るやうである。吾輩が曩きに舊王族を訪問した時も、氣の早い門番先生、吾輩を白人殊に英人とでも思つて注進でもしたのか、引張り出された通辯までが、一時は何となく調子が變であつたのは滑稽であつた。

ジョクジャ及びマウス地方は、更紗及び藍が名產である。

此地方で製造る更紗は、日本でいふコワタリ更紗即ち本更紗のことなので、

更紗中では最も上等なものである。其の製造方法は頗る複雜で、最初白木綿を晒し夫れを椰樹油に浸し、次に其の油を絞り十分乾して、かの例の赤色なるマンギス果の漿汁を使用つて、極めて精密なる色彩を畫くのである。筆は日本のしんかきのやうなので、色は前記のマンギス及びモンコドウといふ樹皮から製したものと今一つは藍である。だから爪哇の更紗は赤藍二種の色彩しかないので、是以外の色が混じて居れば夫は本更紗でない證據である。要之爪哇の更紗は赤藍の唯二色で、複雜なる模樣を巧みに畫出すといふのが特色であるのだ。

吾輩はジョクジャで更紗工場を見たが、上等なのになると、表裏共十分違はず模樣を畫くのだといふことが解つた。で、此種の更紗になると熟練なる職工で一枚を仕上げるにどうしても一個月は要するそうだ。

話が前後したが更紗の表裏共模樣を畫いてしまつたならば、次に鍋の中に熔した蠟を畫筆で、模樣と模樣との間に書き込み、其乾かざるに先ちて其蠟の上

に砂を散布する、是は蠟が乾燥した後に罅裂が生ずるのを避けるためで、斯くしないと色を押へる染甕の中に入れた時に、染料が其罅裂に侵潤して色彩が明晰しなくなるからである。

適當な時期を見計つて變色を押へたる染甕から取出し一旦乾して後、這度は夫を大鍋の中に入れて煮沸する、そうすると蠟が解けて流れてしまう、蠟が解けた處で鍋から出し、河水で洒すと茲に始めて更紗が出來上るのである。

更紗では兩面模樣が最上等で片面のは第二流の品である。近頃歐洲から更紗材料として金巾を切りに輸入して來て、夫の手工の煩雜を避ける爲めに型紙を使用し、任意の模樣を染出すから外觀は非常に美麗だが、更紗としては到底爪哇本來のものとは比べものにならない。從つて價格も非常に低廉い、爪哇の本更紗になると、上物一反五十圓乃至百圓である。

藍は爪哇の名產だ、爪哇產の藍で日本に輸入されつゝあつたのは、從來横濱

のサミユール商會が一手販賣權を掌握して居たもので、同商會は少くとも三割の利益を得つゝあつたらしい。尤も近頃では生產地と直接取引をするのだから從來のやうなことはなからうと思ふが、夫でも爪哇で實際藍取引の狀況を見ると、門外漢には實に不思議なやうに高價い。

毎年藍期節になると生產地では一ケ月中に四五回市場が立つが、實に盛大なものである。市場へは田舍から土人が擔ぎ出すので、石油箱一杯の藍で百圓乃至三百圓もするのがあるが、門外漢には何故に斯く高價なものであるか、殆んど了解に苦しむ程である。

恰度神戸の某商館から藍取引のために滯在して居た某氏に聞いたが、世に藍の鑑定程困難しいものはないそうで、上物だと思つて高價く糶落した品が存外下等品であつたり左程でもないと思つて手に入れたのが、意外にも最上品であつたり、此位解らないものはないそうで、全然相場が富籤でも行るやうだと話

じて居た。夫だから大抵の商人が二等品を手に入れ、其中から一等品を撰出して利益を得てるやうだ。是が最も安全な方法で、永年取引して居る專門家でも安心して最上品を買ふことはできないものとしてあるそうだ。それであるから近來歐洲人は、分析した上で相場を定める樣だが其れでも矢張り明白な識別がつかぬやうである。例へば灰色の樣な色をして居る品を最上等と分析の結果決定するとして、此を日本人が上等價額で仕入て染屋に染めさせて見ると、分析上良質と見止めたが灰色が、上等品でなくして、却つて他のドギ〳〵した色の方が良く染まると云ふよふな事で、實に品質を區別するに困難であるさうだ。

(七) 瓜哇珍談

官營旅館——世界第一の植物園——壯觀驚くに堪えたり——土人の自然主義——瓜哇島に於ける日本の遠征艇于軍——バタビヤ市——東洋第一の築港——白人の服裝——珍奇妙々の屯田兵——人見市太郎君の同情——驚くべき支那人の勢力

マウス驛には官營の旅館がある。是が中々面白いのでソラバヤを發しスマラン市を經てバタビヤに行く途中、汽車は必ず此驛に一夜停止することになつて居る。一夜間の停止は隨分永い、氣の短かい日本人は僅々數分間の停驛でも、切りにやきもきして居るのが癖であるが、而も夫が一夜の停驛だから驚かざるを得ない。マウスに斯の如く長時間の停車を規定した和蘭政府は、商賣上からは拔目がないといつて賞めてもやりたいが、其官營にかゝる旅館に前程を急く旅客をして絕對的一泊を强いるのは、旅客の便利を無視した亂暴なやりかたといはなければならない。宿料も中々高價い、而も是が和蘭政府の收入になるのは言はずものこと。

マウスを發したのが午前七時、乘客は大抵瓜哇の土人ばかりだ。此邊一帶火山質の山が多く、富士山形の山が彼處にも此處にも聳えてる。それに熱帶の事であから、總べての植物が皆生々として、宛然綠の焰が森の中からでも立上り

そうに見える。日本の風光も無論惡くはないが、焦げつくやうな日光を浴びて大森林大田圃の綠が刻一刻と濃くなり行く熱帶の景趣も、又捨て難い味があるのである。

吾輩はブリーテンズローで汽車を下りた、世界で有名な大植物園を見んがためである。此地の植物園が吾人の耳に殆んど世界一であると響いたのは久しき以前のことであつたが、而も實際目のあたり見ての驚きは大したものであつたのである。

植物園若くは公園といふと直ぐ例の箱庭的のやつを聯想する日本人には、吾輩の話ばかりでは其實際を想像することが或は困難であるかも知れない。と又一つには其壯大を紹介するに、筆や口に借りたのでは、迚も其目的を達することのできない憾があるので、吾輩も始めて見た時アッと開いた口が、暫らく塞らなかつたことを白狀して置かねばならぬ。

ブリテンズローは植物園は總が天然的である。日本は申すまでもなく歐米諸國で、例の硝子張りの温室に培養してある熱帶植物が、熱帶の本場だけに唯自然の儘に生ひ繁つて居る。日本で糸にも似たる蔦の如きは殆んと腕大に均しく鬱然たる熱帶の大樹を纏ふて壯觀眞に比なしである。其他燒くが如き赤道光を遮つて、晝尙ほ暗き綠陰あり。樹間を縫ふて此處彼處と徘徊すれば、宛然深山幽谷にでも迷入つたやうである。是でも果して市街に近き植物園であるかと思ふと、熱帶の太陽が其植物に垂れる惠の如何に大なるかゞ解る。殊に面白いのは蓮池に繁茂した蓮で、其葉は恰かも大形の洗濯盥のやうである。即ち蓮葉の周圍は高さ四寸位に折返つて、底の淺い圓筒狀をして居る。蘭は日本の盆栽狂として垂涎三千丈たらしむる底のが澤山ある。南洋探檢の快男子副島八十六君が、大隈伯の依囑を受け物々しき仕度で、瓜哇の深山に蘭採集に出掛けんとして居たのに徵しても、其如何に見事なものがあるかゞ想像されるであ。

綠の樹蔭に腰打下して休んでると、一個の年若き土人が吾輩の傍に[illegible]た。風俗は例の更紗の腰卷き、土人としては服裝の卑しからぬ方であつたが、暫らくすると其處へやつて來た瓜哇婦人の手を取つて、さも待兼ねたといふ風に自分の席を少し讓つて坐らせた。而も吾輩には委細構はず、互に手を取り合つて切りにベチャベチャと多辯り始めた。此時會話の意味が少しでも解つたならば、大に興味を催したかも知れないが、折角の私語低唱遺憾ながら何とも合點ゆかず、唯朧氣ながら是れ現代の所謂自然主義を奉ずるものだと推察しただけであつたのは、聊か何だか物足りない心地がしたのである。

一通り植物園を見盡し、再び停車場に取つて返し、バタビヤ行きの列車に投じて、美しきブリテンズローを出發したのである。

日本の醜業婦が殆んど世界のあらゆる方面に發展しつゝあるは、最早掩ふべからざる事實で、吾輩は曩きに新嘉坡の處で其實狀に就て少しばかり語つたが

更に轉じて瓜哇に入るに及び、其侵略勢力の猛烈なのには、一驚を喫せざるを得なかつた。ソラバヤ、スマラン、到る處多少の日本人の居ない處はないが、而も其日本人が大抵所謂女郎屋の親方なるものである。新嘉坡では此親方が遊廓内に棲むことができないので、中には親方が其副業として雜貨店などを經營して居る。新嘉坡の雜貨店では音宗商店を除いて、他は大抵是等親方の經營にかゝるものである。

話が餘事に渉つたが、要するに瓜哇でも到る處日本人が居る、而も其日本人の大部分が女郎屋の經營者であるとしたならば、外のことは兎も角、無錢旅行の吾輩としては、どうしても彼等親方達の同情に浴せざるを得ないので、事實又此種の人々は浮世の荒波と戰つた人だけに、其心の奥深には實に深い熱實な同情心を有して居る。我輩も旅行中其同情に浴すること決して少くなかつたので、現に汽車がバタビヤに着くと、吉坂虎吉といふ人が非常に同情を寄せられ

てバタビヤ滯在中は同氏の宅に宿泊するの便宜を得たことを感謝しなければならない。

和蘭も今から凡そ三世紀前までは隨分全盛を極めた國で、バタビヤに砲壘を築き此處を根據地として附近を占領し始めたのが、一千六百十九年頃であつたのである。從づて其當時バタビヤの盛であつたことは非常で、東洋の女王といふ名さへ與へられてあつた位で、今でも蘭領印度中の首府であつて和蘭の總督府がある處だ。

市街は舊バタビヤ港の海岸から、內地二三哩の間に建設されてあつて、上下の二區からなつて居る。下區即ち下町には支那人が多く洋人の官衙商店などもあるが、彼等は決して此處に宿泊しないで、毎日上町から出勤しつゝあるのだ。

上町即ち東京なら山の手とでもいふのか、下町を距る一哩の高地にあつ

て、此處は一名ウエルテーブレーデレと稱せられ、土地高燥、空氣清洌、頗る健康に適し下町のマラリヤ熱の多いに比べては、實に結構な處であるのだ。從つて官衙學校寺院砲臺兵營博物館及白人の住宅が、熱帶椰樹の間に隱見して風趣誠に見るべきものがある。

普通バタビヤ港といのが、船舶の發着する處はタンジョンプリオクといふ處でバタビヤを北東に去ること約四哩である。港務局、稅關、倉庫、停車場の設備があつて、中にもバタビヤ間に於ける交通運輸の便を計るために、運河と鐵道の設備がある。一體和蘭といふ國は水と深い緣があつて、バタビヤ附近の水運は中々發達して居る。

瓜哇に來て見るべきは所謂バタビヤの築港で、實に東洋第一と稱せらるゝところのものである。汽船は棧橋に橫着けする、載荷は起重機でガラ〳〵〳〵と倉庫に納める、汽車に積むといふ風に、それは〳〵目にも止まらぬ早さである

夫であるから日本で築港でもするといふ場合には、必ずバタビヤ築港視察として專門家を派遣することになつて居る。

築港視察といへば吾輩が新嘉坡を發して、瓜哇に渡航せんとする時であつた恰度築港視察を濟して歸途にあつた日本の某工學博士と某工學士の乘つて居た汽船が途中で難破し、あはれ熱帶の海に空しく鯱の飼食となる筈の博士學士が幸にも一汽船に救はれて新嘉坡に歸着したといふ話を聞いたのである。

閑話休題、茲に困るのは例の運河で、雨期には能いが旱魃時になると、熱帶地方だけに水が腐敗し、夫がために時々惡疫が流行するやうである。併しながら人の想像する程、不健康地ではないので、和蘭人の設備だけに甚だしい非文明の點はないのである。

瓜哇人の風俗が餘程開けて居る筈のバタビヤでも、依然として馬來的であるのは勿論であるが、素人の見る目に一寸奇妙に映ずるのは、和蘭人の商店である。

是が特色とする處は、其店頭を美々しく飾りたてないことで、商品などは奥深く陳列してあるから、顧客は一々奥まで入つて行かなければならない。それに今一つ意外に感じたのは、在留の和蘭人の風俗で、歐洲から渡航したての人々や、國粹保存を嚴ましくいふ連中はさうでもないが、普通上流の紳士淑女でも、永く在住する内には自然瓜哇風俗の氣樂な點に感化され、一流の旅館などに行つて見ると、ヤレ風俗とかヤレ習慣とか日頃むづかしいことをいふ淑女などが、全然瓜哇風をして得意然と構へて居ることであつた。而も其風で立派な食堂に出てくる。即ち更紗の腰卷きと薄い絹製の上衣の儘で、尤も無理もない話で苦しいコーセットなんかをはめて、鶴が棒を呑んだやうに首ばかり眞直にして居るのが、他所なら兎に角赤道附近の瓜哇あたりでは、全く苦しいであらうと思はれる。吾輩は或時一婦人に面會して、其風俗觀を叩いたことがあるが、其婦人の言に依ると、瓜哇風をすると最早洋服は嫌になるそうである。併し

し最初は隨分他人が爪哇風をしてるのを見て、變挺に感じたけれども、勸めらるゝ儘試みに着て見ると、案外どころか非常に着心地がいゝので、這度は自分の友人を勸めるといふ風に、其當時では和蘭人で土地の風俗を眞似ることが非常に流行してきたのである。

あはれにも面白いのは爪哇の屯田兵である。兵士といへば嚴ましい軍服に身を固め、劍を佩び立派な兵營に毎日調練をやるのを聯想するが、爪哇の屯田兵は決してさうでない。勿論屯田兵であるから普通の兵士のやうな譯にゆかないにしても、爪哇の屯田兵は又餘りに慘澹たるものである。彼等が行軍する處を見ると、アンペラ一枚を持ち袋を脊負ひ、錫製の大きな辨當箱を腰にブラ下げて居る。で、又彼等行軍の場合に於ける炊事場は亂雜極まるもので、辨當箱を以て吾先きにと炊事場に突貫する態は、迚も此世の態とは見られない、彼の餓飢道の亡者も斯く迄にはと思はるゝばかり、節制もなければ規律もない、粗食

はと見れば黑パンと大豆の煮たの、それに雪駄の裏皮にも劣れる牛肉である。彼等の兵舍は郊外に近き處に置かれてあるが、屯田兵のことであるから、常に其妻子と同棲して居る。政府から一定の費用を貰つて、其日々々の煙を立てゝ行くので、兵舍とてもバラック式の日本でいつたら、場末の貧民窟に於けるイロハ長屋と等しいものである。

熱帶地方であつて之加地味が肥えて居るので、產物は砂糖藍米茶珈琲等の農產物を始めとし、生產物は例の更紗が世界に珍重されて居る。

砂糖の製造は盛大で爪哇產糖の三分の二は、和蘭人の製造會社の產出にかゝるので、全島約百五十ケ所ばかりの工場がある。一會社一年の製造高は六萬斤で、其當時でさへ年額一億圓の輸出があつた。

珈琲は爪哇島が英領時代に、總督のデンドル將軍が殆んど强制的に、土人を經營して栽培せしめたので、今日の盛況を見るに至つたのである。

砂糖といへば當時大阪の某製糖會社の囑託を受けて、人見市太郎君がバタビヤに居られたので、一日訪問して面會の榮を得、種々瓜哇の狀態に就き有益なる指導に預かつたのみならず吾輩の旅行にも多大の同情を寄せられたのは感謝に堪えない。で、例の南洋探檢の快男子副島八十六氏の人物評などがでたが、人見君も副島君が一種の南洋通であることには同意されて居たやうである。

人見君の居られた旅館の一室には、同君が採集された參考品が陳列してあつた。其中でも諸種の猛獸皮鰐皮藍及び更紗の見本は中々珍であつた。吾輩其時さう思つた、金があつて旅行するものと、金がなくして旅行するものとは、斯く迄の徑庭があるかと、吾輩も諸種の參考品を採集したいは山々であつたが、一汽車前程に進めば囊中早や無一文となる果敢ない身であつたので、羨慕しいとは思ひながら、人見君の旅館を辭し去つた事があつた。

人見君は國民新聞の德富蘇峰君の女婿で、吾輩がバタビヤを出發する時には

方々への紹介狀を惠まれたので、夫がため吾輩の被つた便宜は大したものであつたが、中にも當時の露國公使であつた本野君に紹介されたのは、感謝措く能はざる處であつたのである。

日本が世界で有數な人々を有つて居ることは誰でも知つて居る事實たが、瓜哇が五萬五千五百九十平方哩の面積に對し、人口二千六百十二萬五千人を有するのは、一口に南洋とけなす瓜哇には珍しいことである。

和蘭政府は九年前までは日本人を遇すること土人と等しく、官吏に向つては土下座をさせたもので、條約改正後は白人と同等の待遇をするやうになつた。併し土人支那人馬來人は今でも同じで、官尊民卑の弊習は依然として止まない吾輩の考へでは慥かに日本の德川時代のよふに思つた或點に於て甚だしいやうに思はれる。併し在留支那人の數が白人に數百倍し、幾世紀以前より着々として蓄積し來つた商業的勢力は、最早犇として動かすべからざるものがあり、且

又彼等は清國の支那人にあらずして、實際には瓜哇の支那人であるの故を以てソラバヤでもスマランでも、支那人在留者の多い地には、特に支那人に自治の權利を附與し、支那人は支那人に依つて支配されるやうにしてある。其代り支那から瓜哇に輸入するものに對する課稅は、輸入者が白人ならば價格の三割であるが、支那人は其倍額即ち六割を徵せられる。斯くして和蘭政府は自國の商人を保護するにも係らず、どうあせつても支那人と競爭することができない。而も關稅ばかりでなく、普通の稅金でも支那人は悉く白人の倍額を拂つて居るが、夫でも和蘭の商人では僅かに範圍の狹い白人を顧客とする者が、比較的成功して居るだけで、其他は到底お話にならない。孰れにしても支那人は不思議な人種であるのだ。

吾輩は瓜哇を告別するに付き再び人見君を訪問し、同情深き厚意を謝して別んとするや、吾輩の手を握ながら忠告された、旅行者は日記が必要ですよ、僕も

經驗があるが長い旅行は總てのことを記憶して居ることは困難であるから、必ず日記丈は忘れぬやうにして置くべしだ、其れから中村君若し出來得べくんば新聞に通信して貰たいがどふでしよふ、實は國民新聞です、僕は德富の知己であるから是非願ひたいものだと云われたので、吾輩は此任務を心易く引き受けて承諾したが、其時そふ言つて置いた、モシ通信が切れたならばその時は郵便錢が無い時であると思つて呉れたまへと笑ひながら指の赫くなるほど握手して告別した。

(八) スマトラ島探檢

パタビヤ出發——日本遊廓——幻燈器械の寄贈を受く——惡臭横溢——甲板に於ける宗教的勤行——船中の大珍事——無禮なる馬來人——林君の鍬拳——上を下への大騒動——ランゲン號

吾輩のパタビヤ出發に際しては、例の南洋遠征軍の男女が熱實なる同情を寄

せてくれたので、旅費もかなりの額に達し、日頃よりは財布も少しは重くなつた。

時は三十五年の四月十日、吾輩はバタビヤを出發してスマトラ島探檢の途に上つたのである。乘船は獨逸船のジヤワ號、例に依つて上甲板は甲板客で大入大繁盛！

瓜哇島の北に當つてツキデン群島といふのがある、此群島は錫に富んで居て其中でもカトク島の如きは全島悉く是れ錫といふも溢美でない、採掘は重に支那人である。

船はスンダ海峽を船尾に見失ひ、北航してバンカ海峽に入り、アランの河流を逆航すると二十五浬、薄暮バレンバンに錨を投じた。で、此處ではバタビヤの吉坂といふ人から紹介されて、同じく女郎屋の親方林弘君を訪問すると同君は非常に喜ばれて下へも置かぬやうに歡待された。

思へ！、日本人の内にバレンバンの地名を知つてるもの果して幾人あるだらう。否恐らくあるまい、而も同胞の夢にも知らざるスマトラの一角バレンバンには、例の醜業婦が偉大なる勢力を以て發展しつゝあるのだ。前記林君は遠征娘子軍を率ゐる親方の内でも、中々の勢力家であつたのである。

林君と雖も最初からの親方ではなかつたのであるが、途中商業に失敗し止むを得ず女郎屋と宗旨を換えて、現今はバレンバンで大に成功して居る。併し其成功を謳歌すべきか非難すべきかは第二の問題として、同君が一種の奮闘兒であつたことだけは事實である。厄介になつたからいふのではないが、林君の如きは女郎屋に親方として一生を終らせるには惜しい人物である。而も蠻境に醜業を營んで居るもの、是れ人の罪にあらずして境遇の罪である。

バレンバンはスマトラ、馬來の土人街であるが、支那人街に行くと稍々商業的市街の面目を備へて居る。此地方に於ける土人の家屋は頗る妙で、大抵二階

造りの下は明け放しである。最初一寸變に思つたが、譯を聞かされ〻成程と思つたのは、土地が熱帶であるから階下は通風に便するために、斯の如く空虛であるといふことであつた。何しろ建築材料としては例のチーク材が、幾らでもあるから床は一切板間である。

日本の雜貨が此處で賣れて居る。品種は齒磨き揚枝陶器類石鹼等で、贅澤品でなく必要の日用品ばかりであるから、將來滿更望のないことはあるまいと思はれる。

此處に三日程滯在した。林君の盡力で旅費もできた。吾輩は是より一度新嘉坡に歸着して、二度スマトラの北に入るか、若くは馬來の北部に入らんと欲したのである。

處が此處では林君から幻燈器械を贈られた。是は抑もいはれのある話で、當時北清事變後で日本の武名が到る處謳歌されつゝあつたものだから、機を見る

に敏なる林君は、早速日本から北清事變の映畫を器械と共に取寄せ、自分の養つて居る醜業婦にも見せ、傍ら幻燈會を開催して大に好評を博したものである。で、吾輩に是を贈つた所以のものは、要之是を旅費調達の目的に使用せしめんためであつたものだから、深く其好意を謝し其器械を脊負つて、新嘉坡に歸らんとしたのである。

旅行は道連れ世は情けといふが、眞實それに違いないので、林君が初對面の吾輩に斯くまでの同情を寄せられたゞけでも、既に十分感謝すべきであるのに同君は商業用の目的で次の便船に乘つて新嘉坡に渡航する筈であつたのを、態態差繰つて吾輩と共に行かんことを申出られた。如何に風船玉の如き吾輩でも不案内の地を旅行するに是程有力なる同伴者ができた時は、有繋に心强く感せずには居られなかつた。

四月廿六日の早朝、吾輩の乘つた汽船はバレンバンを出港し、アラ、ン河を

下りバンカ海峽を北上し新嘉坡に向つたのである。

曩きにアラ、ン河を逆航するとき、一種の水草が河流に浮んで盛んに流されるのを見たが、其時は唯一時的の現象に過ぎないと思つたので、格別氣にも止めなかつたが、愈々バレンバンを出港し流れを下るに當り、甲板上から再び其現象を見て奇異に感じ、傍なる林君に訊すと、是れ一年三百六十五日間の現象であるといつて居た。

船中は相變らず甲板客で滿員、多くは馬來人スマトラ人の新嘉坡に向つて去來するものである。此船は別に船客室を有つて居なかつたものだから、吾輩二人も蠅氣横溢せる甲板客に混じて、赤道直下の航海を續けたのである。食事時になると甲板の方々で、是等甲板客の炊事が始まる。見ると馬來スマトラの先生達は、一生懸命で、ライスカレーを製つて居る。此方では支那人が豚の鹽肉を美味さうに喰つて居る。異臭紛々鼻を突いて、吾等は喰はないに此

等の御馳走に醉はんばかりであつた。併し斯くてあるべきにあらざれば、船員に請ふてパンを貰い、二人は是で腹を拵へたのである。

翌朝になると馬來スマトラの土人共は、額に黑色若くは黃色の彩色をして、是に手をあて又は合掌しつゝ、甲板上で今しも地平線より顏を出した朝暾の陽光を拜して居る。是が彼等日々の勤行であるのだ。

處が俄然大珍事が出來した。事件の起因は斯うである。

前に言つた通り甲板は甲板客で滿員であつたものだから、出港以來小紛擾が絕えなかつたのである。從つて弱肉强食は是等土人中にあつても矢張り眞理で、恰度十時頃、一個の人相の頗る獰惡な馬來人が、傍の人の善さそうなスマトラ人に向ひ、無法にも席を讓らんことを求めた。併し是が抑も珍事の起る動機で、全體此馬來人の請求が不法極まるものであつたのみならず、席を讓るべく迫られたスマトラ人が、其要求を拒絕するに及んで、彼は激怒して突如ス

マトラ人の頬邊に鐵拳を加えた。是には有繋にお人善しのスマトラも憤怒し、直ちに立つて是に抵抗したのである。然るに馬來の相好が野獸の如く猛惡である如く、彼の腕力も又非凡であつたと見え、あはれ狼に及向ふ羊の如く、正義のスマトラは馬來に捻伏せられ、悲鳴を上げて助けを呼んで居る。併し件の馬來の勇氣に恐れ誰一人として、スマトラを助けんとするものがない。

斯ういふ場合に出るのが日本人である。林君は九州男子で狀貌怪偉、優に蠻民を威嚇するに足るの人である。

「君あの野郎馬鹿に相手を苦しめるぢやあないか。」と吾輩林君の肩を叩いて聞くと

「ウム、怪しからん奴だ、見給へ僕が今酷い目に遇してやるから。」とやをら握太の洋杖を構へて立上つた。

「畜生！不屆至極な奴だ。」と獨語しながら靜々と近づい

「オイ亂暴なことは止せ。」と態と優しく馬來語で諭した。

當時北淸事變の餘光で、日本人は到る處武勇を以て鳴つて居た。殊に南洋方面では支那に近いだけ、其評判は大したものであつたから、林君の說諭に依つて組伏せたスマトラを放すかと思ひの外、件の馬來は恐しい一睨を林君にくれて、

「貴樣の知つたことぢやあない、餘計な世話を燒くな。」と傲語して相變らず鐵拳を亂下して居る。

「餘計な世話だ、生意氣なことをいふな。」と林君の顏色も漸く獰猛になつてきた。傍の吾輩を顧みて

「此奴等バレンバンに居ると日本人に頭は上らない奴だが、一度土地を離れると直ぐあれだよ、一つ酷い目に遇してやらないと癖になつていかん。」といひながらツカ〳〵と近寄つて

「オイ止せつたら止せ！。」と襟首を捉へて引分けんとしたのを引拂つて

「何をするッ、いくら日本人でも甲板客である以上は、乃公等と權利は同等だ、殊に乃公は種族の制に依つて、乃公等の階級の威嚴を示すのだ。」と頑として應じないばかりか、吾輩には無論解らなかつたけれども、彼等が白人及び日本人に對しては使用し得べからざる惡罵の聲を放つたので、（バレンバンでは法律の制裁まで受ける惡罵の言語）林君は大に怒り吾輩を顧みて

「君聞捨てにならんよ。」とさらでだに堂々たる偉丈夫が、面朱を注ぎ怒髮冠を貫く勢で、スマトラを脚下に組伏せ、其爛々たる眼光を林君に浴せかけて居た馬來の腦天目掛げて其儘甲板に滅入れとばかり打下した洋杖は、ブーンと唸りを生じてしたゝか其後頭部を打つた。

打たれて辟易ると思ひの外、顏を少し顰めた馬來は手負の獅子の荒れたるが如く、死物狂になつて林君に向つてきた。

多くの甲板客は上を下へと大騒動、日馬戰爭は今や酣である。組伏せられたスマトラは今更のやうに眼をパチ〳〵して居る。同族を毆られて馬來人の一群も、林君の武者振りに恐れて、其同胞に助太刀する奴もない、といつてスマトラを助けた林君に應援する同族もない、戰爭は正に一騎打ちである。

林君は其鄕里熊本で擊劍を學んで、而も優に免許の技倆を有つて居たので、折柄の洋杖をさゝ、くの武器として、馬來の壯漢を一擊の下に打碎かんと身構へた處へ、無暗無鐵砲に向つたのだから堪らない、横面を毆られる、足を拂はれる、頭部には小山の如き瘤が三つも四つも出來た。此儘で行くと馬來人は打殺されると思つてると、騒動を聞いて駈付けたのが英人の船長で、まア〳〵待つたと演劇ならば止男の役であるが、兎に角と林君を宥め其振上げたる洋杖を下さしめ、事件の顚末を吾輩に聞くので、見た通り聞いた通り、馬來の不遜なる言動を凝らさんための騒動であると、仔細に英語で說明すると、髭の船長始め

て合點し、

「さうですか、彼奴等の野蠻にも毎度困るですよ。」と更に林君に向つて其膺懲の勞を謝するのであつた。

此日の午後赤道を通過し、船は北緯の海に入つた。翌日午後新嘉坡に入港、林君と共に上陸日本人の旅館中野屋に旅裝を解いた。

其晩林君と共に例の幻燈器械を試驗して見ると、舊式でこそあれ非常に好結果であつたので、何時かは一つ幻燈會を公開して旅費の調達しやうと思ひ、在留中の同情者に告別し、折柄出港の英船ラングン號に便乘して海路ラングンに向つた。

(九) 彼南に於ける幻燈會

玉轉かし——纏つた旅費が必要だ——そこで幻燈會と氣が付た——急稽古の馬鹿囃——觀客は日本女郎諸君——眞黑なお客樣が押寄せて來る——

——大拍手大喝采——財布も重くなつた

ラングン號は新嘉坡を出港しマラッカ海峽を扨け彼南に入港した。

吾輩は上陸すると直ぐ日本の宿屋の遠州家に宿泊つた。自分が三州の出身で山河萬里の異域に於て、隣國に緣のある遠州家に草鞋を脱いだのは、何等かの因緣でもあるやうに思はれた。

彼南には日本人が二百人ばかり居る。併しながら例に依つて其大部分は醜業を營むもので、其他料理店旅館などを經營するものもないではないが、茲に一つ珍しい商賣が熱帶の彼南に行はれるといふことを耳にした。珍しい商賣、然り珍しい商賣である。

此附近一帶、其支那たると印度たると、爪哇たるとスマトラたるとを問はず日本の醜業婦の居ない處のないことを知つてる人でも、恐らく彼南に玉コロガシの行はれてることまでは、有繋に氣が付かなかつたであらう。而も是を以て

大成功を遂げた奴があるに至つては、吾輩は其人の烱眼に驚くと同時に、所謂成功なるものが何處に轉つて居るか解らないものであることを覺つたのである。併し吾輩の行つた頃には、猫も杓子も玉コロガシを開業したので、客は減る同志打ちは始まるといふので、此商賣は冬枯れの景況であつた。英國政府は是を一種の賭博と看做して、重稅を課し始めたので弱り目に祟り目で、是等の營業者は靑息吐息であつた。蓋し止むを得ない自然の成行である。

此處で少し吾輩が彼南に上陸した理由を述べなければならない。一體彼南といふ土地は新嘉坡と同じく、東航する船も西航する船も一度は必ず寄港する港で、馬來半島に入るにもスマトラ島に渡るにも便利で、旅客は一應どうしても此處に上陸する必要がある。即ち或意味に於ける人類の集散地であるからして、吾輩も此地に上陸しおもむろに旅行の前程に關し、其スマトラを先きにすべきか、若くは馬來半島を先きにすべきかを考へなければならなかつたのである。

而もスマトラを先きにし、馬來半島を先きにするも、其纏つた旅費の要ることは同じくで、吾輩は玆に例の舊式の幻燈器を以て、所要の旅費を儲け出さなければならない境遇に立至つたのである。で、重立つた在留者に相談すると、孰れも大賛成をしてくれて、會場の借入廣告の配かたなど萬事拔目なき周旋に、到着した翌々晩會場として借た空家で、愈々幻燈會を開催する事になつた。

午後七時開會の手筈であつたから、五時頃には會場の粧飾其他一切の設備を終つた。活動寫眞でも是に樂隊が伴はなかつたら、非常に間の拔けたものになり了せるから、況して幻燈はどうしても樂隊を入れなければならない。併し興業主が無一文の吾輩で、何しろ空家を借りて開會する騷ぎだから、手の揃つた樂隊を雇入れることは到底不可能である。そこで此事を開場の前日或人に話すと、それもさうだが、どうも樂隊を雇ふ譯に行かない、宜しい夫では連中を集めて馬鹿囃でも入れやうといふので、吾輩も大に安心して、夫では何分宜しく

頼入ると音樂の方は其人に頼んで、吾輩は會場 粧飾の方に廻つたのである。後で聞くと其人が在留邦人の間を説き廻り、自分が其心得があつたのを幸、自ら連中に師匠として急に其稽古に取掛つたとかで、萬事さういふ肩の入れ方で吾輩も大に心強く感じたのであつた。

廣告は英語馬來語兩方にして方々に配つた。此印刷配付など人手を借りたこと、今更申す迄もないことで、前景氣は是で全部ついたのである。

婦人の三駄羅凡腦として人は能く演劇と薩摩芋と南瓜を數へるが、成程是には理窟があつて、婦人が演劇と聞いて狂氣のやうになるのは、東西古今同一轍である。併し赤道附近で營々として醜業に從事する彼等醜業婦は、薩摩芋も喰へなければ南瓜も喰へない、況んや一番好きな演劇に於ておやで、吾輩が幻燈會を開催すると聞いて、彼等の喜びは實に其極點に達したといふことである。で、彼等は日頃何等慰藉のない身の上であることを訴へて、樓主に幻燈會の觀

覽を許されんことを申込むと、樓主連も大に同情心を起し、午後八時から例の醜業を開始し、黑いのや赤銅色したのを送つたり迎へたりしなければならない筈であるのを、特別の慈悲で午後七時より九時に至る二時間を、彼等醜業婦連の自由觀覽にあてたのである。尤も此間と雖も一般入場者を謝絶するやうなことはしなかつた。

開會時の午後七時には、例の娘子軍を初めとして馬來人スマトラ人支那人で滿場立錐の餘地もない程の盛況であつた。是に在留邦人の主立つた連中が總見物にきてくれたので、尙一層際立つて景氣がついてきた。

午後七時興業主たる吾輩は、日英兩語で開會の辭を述べ直ぐ映畫に取掛つた まづ畫が寫るまで一段馬鹿囃しが始まる、這麽處で馬鹿囃を聞かうとは豫期しなかつた吾輩は、其曲の可笑しさ面白さより、或一種の感慨に打たれて腦はまづ一杯になるのであつた。

幻燈の畫題は北清事變を仕組んだので、支那人の觀覽者に對して少し妙ではあるまいかと思つたが、此邊の支那人は所謂南部の支那人で、現今の滿人の政府を惡むことが甚だしいからして、少しも其邊の懸念はないと注意され、成程考へて見れば大に道理だから、委細構はず開會することにしたのである。

北京籠城の慘澹たる有樣や、聯合軍北京救援行動、太沽砲臺の占領白石大尉の奮戰、楊村の大激戰、其他日本軍の行軍戰鬪の光景等で、にわか稽古にしては中々うまい馬鹿囃と相俟つて、大に觀客の好評喝采を博した。

會場前には切符を賣れと札賣場に突貫せんとする群衆を以て充たされて居たが、九時になると例の娘子軍の一團が歸つてしまつたので、夫と入代つて更に黑山の如き見物が、潮の如くに押寄せて來たには、吾輩も人情の面白いのに有繋に驚いてしまつたのである。

豫定閉場時間が十一時で、入替へ取替へ種々の映畫をして見せる內に、何時

しか十一時になつたので、吾輩が閉會の辭を述べやうとすると、觀客がまだやれ〳〵といつて承知しない。そこで明日及び明後日共新畫を差替へて御覽に入れるから、今晩は時間も差迫つたので、遺憾ながら閉會の止むを得ないことを演述すると、漸くの事に觀客は納得してしまつたので、吾輩は更に語を繼ぎ、斯くの如き成功を告げた所以のものは、偏に觀客諸君の同情に依つて然るので自分は茲に萬腔の感情を捧げるのであるから、どうか明日明後日共賑々敷御來場を希望するといふと、觀客の方からは大拍手大喝采が起り、其晩は目出度閉會したのである。

其翌日と翌々日も非常な大入りであつたものだから、諸雜費を差引いても尙、かなりの利益があつたので、吾輩の企てに多大の同情を寄せ、尙何呉と盡力してくれた人々の勸告に依り、此利益は全部吾輩の囊中に收めるの光榮を有したのである。

彼南に上陸した當初の目的は達せられた。イザヤ是よりスマトラに入らんか將又踵を轉じて馬來の北部を踏破らんかと、暫らく其取捨に迷つて居ると、計らず玆に木村といふ同行者を得たので、吾輩は終に海を渡つてスマトラの北部を探險せんと決心したのである。

(十) 猛獣の如き婦女誘拐者

再びスマトラ島探檢の途に上る——獣慾の犠牲——暗黑なる甲板——惡鬼の如きピンプ——スマトラ内地に日本婦人四百人白人の妾となる——月給三四十弗——日本人の無賴漢——裸體一貫元の獣阿彌

午前六時彼南出港の英船スマトラ號に便乘して、スマトラ北部探檢の途に上つた。此航海は曩きに彼南の幻燈で成功したので、左程苦しまずとも濟んだのである。船客は例に依つて例の如く、スマトラ、馬來の甲板客で滿員、日本人は吾輩とそれに同行者の木村といふ吳服行商人で、此外婦女誘拐業者が一人

と、是に誘拐されてスマトラに渡航せんとする婦人三名で、日本人全體としては都合六人であつた。

新嘉坡附近では此婦女誘拐者のことをピンプといつて居る。で、此ピンプが多くの婦女を誘拐し、其悲慘なる境遇に泣かしめるさへ既に天誅に値するのであるが、彼等は是を以て足れりとせず、誘拐の途中必ず被誘拐の婦女を辱しめなければ止まない。中にな其毒牙にかゝつたのを恥ぢて、自ら無殘なる最後を遂げるものもある。併し又女性の身の心弱くも、其殘忍なる壓迫に遇つて、泣く泣く彼等惡鬼の獣慾的犠牲になるもの、殆んど十中の十であるに至つては、驚かざらんと欲するも豈に得べけんやで、實に吾輩の如きもスマトラ號の甲板に於て、其慘劇を實見した一人であるのだ。

彼南を出帆してから幸海は平穩であつた。其内に日が暮れかゝると、馬來スマトラ共が落日に向つて禮拜する。夫が濟むと何時とはなしに甲板の上が薄暗

くなる、兩舷燈檣燈が夢のやうな光りを熱帶の海に投げて、推進機の響きが刻一刻と寂しくなつてくる。空は晴れて居るが星光の闇を照す由もなく、甲板客で埋められた上甲板に、僅かに朧氣のランターンが二つばかり、曉の夢にも等しき淡き名ばかりの光線を浴びせかけて、夜は漸く深からんとするのであつた。

吾輩は船長の好意で船室を有つて居たが、蒸熱つで堪らないので、暫時上甲板で涼まうと思つて出てくると、有繋に涼しい風が顔をなでる。欄干に凭れ思ふとしもなく越し方の事を辿れば、萬感胸に湧いて征途萬里の行末が、何時ともはなしに案じられる。

星が一つ南に流れた。甲板客は男も女も船の上で船を漕いで居る。途端「お止しなさいよ。」と若い婦人の聲が聞えた。無論日本語で……。熱帶の海をスマトラに向つて南下する外國船に、夜更けて若き日本婦人の唯

事にあるまじき聲を聞いては、誰しも好奇の眼を見張るであらうが、吾輩は此時格別珍しいとも何とも思はなかつた。といふのは彼南を出るとき誘拐者が其誘拐せる三人の婦人を伴つて居た事實を知つて居たからである。又一方では如何に惡魔の如き誘拐者と雖も、婦人の强硬なる抵抗に遇つては、有繋にどうすることもできまいと思つたので、格別深い注意も拂はなかつたのである。併し吾輩の豫期は全然外れた。彼等のこと到底常識を以て判斷し得べきでない。其又手續に至つては吾輩の口にすべき筋のものでない、あゝ止みなんかな、彼等は終に人間界に籍を置くことのできない輩である。

翌朝未明、スマトラ號は無事デレに投錨した。

デレは人口約一千位の市街で、日本人が八九十人居る。雜貨店も三軒ばかりある。人口一千に在留邦人の八九十人は少し多過るが、御多分には洩れない其大部分は例の醜業婦であるのだ。

デレの雜貨店はかなり繁盛して居る。夫れは一大理由があるので、話を聞いて見ると成程と合點が行く。デレから廿哩ばかり內地に茫漠たる煙草の耕作地がある。其耕主は主として白人である。從つて彼等はデレを通過して去來する度毎に、日本雜貨を土產物として購ふことになつて居る。と今一つ重大なる理由は、日本婦人が四百人ばかり是等耕主若くは、煙草園に關係ある白人共の妾になつて居るので、其日用品は自然デレの日本雜貨店から供給を仰ぐといふ風になつて居るためで、さてこそ三軒の雜貨店が相應に繁盛する譯である。

スマトラの內地に日本婦人が四百人も妾になつて居るとは、恐らく讀者には破天荒な事實であらう。而も東印度諸地方に於ける日本婦人の狀態は、到底普通の想像力を以て律すべきでない。來て見れば左程にもなし富士の山といふが此方面を旅行して醜業婦の話を聞くと、實に何から何まで驚くことばかりで、來て見れば聞きしに勝ることばかり、緬甸印度も斯くやあるらん、まだ足も踏

み入れないのに、既に其亂脈さが思ひやられる。

煙草耕地に於ける妾の給料は月額三十弗乃至四十弗である。而して此等の妾連は大抵一週一回賜暇を得てデレにやつてくる。といふのは要之氣保養のためで何しろ煙草の耕地といふのが、漠々千里際涯なき底の境で、而も平常其主人なる白人と相對し、堪へ難い程寞寂しい生活をして居るのであるから、斯くは一週一度の休暇を得てデレに來り、懷しい日本人と相會し他愛もなく遊び暮すのである。で、彼等のデレに來る當面の大目的が氣保養であるから、貫貯蓄の給料及び小遣錢は大抵デレで消費い果し、財布の底をはたきながら元の默阿彌で再び煙草の耕地に歸つて行くのである。

然るに茲に面白い事件が持上るのは、デレに居る日本人の無賴漢が、是等妾共の來遊を待構へ語巧みに欺いて、其他くなきの獸慾を遂ぐるのみならず、甚だしきに至つては其所持金衣類まで捲きあげる奴があることで、妾共も毛色の

變つた白人の旦那より、同じ種の日本人の方がいゝと見え、だまされると知りながら、不知不識深みに陷るのだそうで、中には日本人を買つたことが其主人に知れ、大騒動の末解雇される者も少くないといふことである。何と厄介千萬ではないか。併し吾輩のデレに行つた當時は、何等自覺なき妾共も漸く其馬鹿らしさが解つたとかで、日本人を買つて裸體にされる奴が非常に少くなつたといふ話であつたが、夫でも吾輩の目から見ると意外に感ずる程、其お目出度さ加減が激しいのであつた。而も斯の如き果敢い慰藉で辛くも其生命なき境遇に甘んずることができるのであると聞いては、吾人日本人として一掬同情の念を禁ずることができないのである。

斯の如く煙草耕作地に雇傭されてる妾共が、新陳代謝してデレに滯在するもの、多きは十五六人少くとも七八人はあるので、是がため日本雜貨店若くは料理店は年中賑つて居るのである。吾輩の見る處に依ると、彼等は日本料理店の

二階で賭博を行るらしい。で、其際に相手の日本無賴漢と醜交を結ぶやうになるのであるやうだ。

デレは一名メダンともいふ、日本人協會がある。滯在中は柏木亭と云ふ宿屋に止宿したのである。

(十一) 林中の冒險

大仕掛の煙草園——一癖ありさうな女將軍——遠征娘子軍の幹部——お勝老嬢の厚意——蔚苔たる熱帶の密林——恐しげなる大蛇——一羽の猛鳥——數十頭の大象群——辛くも本道に出づ

煙草耕作地の廣いことは到底想像し得べきでない。大抵一耕主で二百エーカー乃至四百エーカーを所有して居る。で、耕主其他の住宅若くは農具小屋は、其廣い中に彼處此處と點在しつゝあるので、其生活が如何にも寂寞である。是では例の日本婦人の妾が心細がつて、デレで好きな眞似をするのは、無理からぬ

ことだと思つた。

煙草は始め苗場に播種して、それが約一二寸位に生長すると、苗場から煙草畑に移植するのだ。植付は二尺平方の距離で、副三寸長さ一尺の板を日避けのために置いてある。で、朝夕土人の勞働者が葉の表裏を嚴重に檢査し、害蟲の驅除に從事して居る。收穫時になると刈取つて乾燥小屋の中に收めて日陰干しにするのである。

煙草畑は決して毎年續いて耕作らない、少くとも七箇年は其儘にして置かなければならない。從つて耕主一人に就て少くとも七箇の煙草畑を有つて居なければならない。是は毎年續いて耕作すると自然畑が荒れるからで、順々に取換へて耕作ると作物も能くできる譯であるからだ。土人の賃金は男女共大抵十錢乃至十五錢である。

此地方にランカツ。ブランダなどいふ石油の産地があるが、見ると頗る盛大

に事業を經營して居る。工場の如きは二哩四方に廣がり、最新式機械を使用して盛に精製に從事しつゝあつた。

此方面の石油は其性質が中々上等で、就中ランカツ産の如きは優に露米の石油を凌駕する程で、現に數年前迄は三井物産會社の手に依つて、日本に盛に輸入されつゝあつたものであるが、近來露國産の石油及び米國のスタンダート會社製品と競爭することができなくなつて、ランカツ産の輸入は全然其跡を絶つてしまつた。此方面にも遠征娘子軍が發展しつゝあつたには、有繋の吾輩も其侵略勢力の猛烈なには呆然として驚いてしまつた。

一日ランカツを發し小蒸汽で或る石油の産出地を訪れやうとしたところが、土地不案内の悲しさ何時かブランダまで乘越してしまつた。船長に談判するとブランダには日本人が居るから、君も多分其處まで行かれるのであらうと思つたので連れて來たのだから惡からずといつてる。詮方がないから行きあたりば

つたりと度胸をきめて上陸し、其日本人といふのを訪問して見ると、いつもなから外でもない日本の女郎屋であつた。出て來たのが年の頃四十五六、海千河千の魔氣が顏に漲つて、見るから一癖ありさうな女將軍。

「オヤいらつしやい。」吾輩を嫖客と間違へて居る。何だか大に變だ。併し沈默つて居る譯にも行かないので、細々と此處までやつて來た事情を話すと、

「夫はどうもお氣の毒樣でしたね、併し石油工場なら此近所にいくらもありますから、何しろ今夜はお宿泊んなすつて、明日ゆつくりと御見物なすつては如何です。」と下へも置かぬ待遇に、風來無一物の氣樂さ、然らば御免と其晩は其家に一宿の振舞に預つたのである。

女將軍名をお勝といふ、此方面でお勝婆といへば隨分鳴つたものであるそうだ。其晩の身上話には面白い節が多かつた。聞けば東印度方面に放浪すること前後廿年、香港、新嘉坡、彼南、蘭貢、カルカッタ、マドラスと世を捨鉢のツ

イ自棄が嵩じて、苦勞の重なる割合に財布は重くならず、氣も輕ければ尻も輕く、現今ではスマトラの一角プランダに本城を構へ、遠征娘子軍の幹部として盛名嘖々たるものがあるとのことであつた。

「でも詮方がないんですもの。」あゝ是れ意味深重の言ならずして何ぞや。廿年間の凄慘たる歷史は、此一語の內に遺憾なく說明し盡されて居る。

翌朝プランダの石油工場を見て一日を暮し、翌々朝ランカッに歸らうと思ふと、生憎小蒸汽の便がない、さて困つたとは思つたれど、又お勝老孃を煩はすも氣毒であつたので、斷然意を決し陸路ランカッに歸らんとした。で、暇乞をすると、お勝老孃は目を丸くして

「貴郎飛んでもない、那麼ことはお止しなさいまし。」といふ。

「どうして……？。」と問返すと

「此暑いのに貴郎大變ですよ、加之山の中は危險で慣れないものには迚も歩け

る譯のものぢやありません。」とたつて止めるのを、
「何有大丈夫だ。」と出發せんとすると
「否大丈夫ではありません、貴郎那麼ことをなさらずとも、明日になれば、小蒸汽が出るではありませんか。」と親切に言つてくれたけれども、思立つては矢も鐵砲も堪らぬ吾輩のことであるから、
「チト危險目にも遇はんと、日本へ歸つてから土産話がなくて困るからハ……
……。」と笑つて起つのを、お勝老孃氣遣はしげに見上げて、
「さうですか、大丈夫ですか、昨日も貴郎旅人が毒蛇に咬殺されましたよ。」と嘘か眞かおどしにかゝるを、笑にまぎらしながら、其健康を祝しつゝブランダを出發した。間もなく山道になる、鬱蒼たる熱帶の密林を縫ふて、孤劍飄然たる吾唯一人行く淋しさ、焦げつくやうな日光は生い重なつた椰樹の葉に遮ぎられて、時々猛獸の咆哮するのさへ聞える。行くこと三里、道は計らず二つに岐

れた。さて困つた。訊ねんにも近傍に人らしいものも見えない、右せんか左せんかと、路傍に腰打下し煙草を喫みながら考へたが、固より神ならぬ身の孰れが本道か知れやう筈もないので、間違つた時は間違つた時として、斷然夫らしい右の道を進むことにした。
森の繁みは一歩一歩と甚だしくなり、道も漸く險しくなつてきた。吾輩別に寂しいとは思はず、少々險しい位何でもない、其内に屹度道らしい道に出るだらうと度膽を据ゑて進む内に、足は何時しか大森林の内に迷込んでしまつた。氣が付いた時には最う道程もかなり進んで居たので、今更どうすることもならず、エー儘よどうなるものかと、其處にどつかと坐りこみ、物珍しさに四邊を見廻すと、フト吾輩の眼に映じたものがある。と同時に全身冷水を浴びたやうにぞつとしてしまつた。
唯見る前方數歩の近きにある大樹の枝に、恐しげなる大蛇が其尻尾を卷きつ

け、爛々たること炬の如き兩眼を刮と見開き、時々焰の如き舌をチラリ〳〵と出しながら、吾輩を睥睨しつゝあつたのであつた。

是あるかな、お勝老嬢が袂を捉へて切に吾輩の陸上行を止めたのは、あゝ實に是あるが爲めであつたのだ。

此儘此處を逃れんか、夫にしては餘り距離が近過る、大蛇が一搖り其體を搖れば、吾輩を掴む位何でもない。途端何處よりか飛來つた一羽の猛鳥が、ヒラリ大蛇の一眼をつゝくと、不意を喰つて吃驚した大蛇は、血走つた兩眼を怒らし、火焔の燃ゆるが如き口を開いて、突如猛鳥を一呑みと飛蒐つた。是を見た吾輩は機逸すべからずと、後を見ずに一目散、元來し通を足も宇宙に飛ぶが如く駈戻つたが、惡い時には惡いもので、夢中になつて駈出したものだから、何處をどう迷つたのか、先にはなかつた或小川の邊に出た。是は變だとは思つたが、大蛇の口を逃れた嬉しさにホット一息吐き、是から後のことは緩々思案を

廻らすとして、何は兎もあれまづ一服と煙草を吹し始めたのである。

吾輩の腰を下した直ぐ後の方の、藪の中から大怪物がニユッと現はれた。驚いたの驚かないのつて、思はず知らず立上りさまフト振返つて見ると、正に是れ一疋の大野象ではないか、ハッと思つて身をかはすと、雪にも似たる眞白の牙を鳴しながら其儘ザンブとばかり川中に躍込み、流れを亂して渡り始めた。スルト先頭に續いて同じ藪から飛出した見るから恐しげなる大野象が數十頭、ザンブ〳〵と川の中に飛込んだ。其水音の凄しさ、濛々と立登る水煙は灰色の象群を包んで、其物恐しき光景に吾ながら戰慄せざるを得なかつた。

暹羅を旅行してきたのだから、象の群位に恐れるのではないが、何しろ人跡絶へたる大森林中に、數十頭の野象が突如として藪の中から飛出したのだから有繋に吾輩と雖も吃驚せざるを得なかつたので、其大象群に續いて可愛氣な仔象共が、さも嬉しげに水を浴びだしたのを見るに至つて、始めて辛と安心した

のは滑稽であつた。で、其親象子象の大群は驚て其影を對岸の林中に沒したので、吾輩は茲に又ランカッに到る本道につき頭を惱まさなければならなかつたのであつた。併し曩きに大蛇を見て逃げ出した時、同じながら元來し道を迷はずに其儘二岐道の所まで來れば、左する道が當然ランカッ街道である譯だが、今何處とも知れざる川邊に迷出てゝは、唯途方に暮るゝばかりで、今更ながらお勝老嫗の先見の明に服せざるを得なかつたのである。

捨つる神あれば拾ふ神ありとかや、暫くすると一個の土人がやつてきた。尤も此時は此土人が果して吾輩に對し善意を有するか惡意を有するかを計りかねたので、故意と知らぬ顏をして彼の樣子を覗ふと、格別敵意を挾んでるやうにも見えなかつたので、手眞似身振りでランカッ街道を訊ねると、幸にも能く解つてくれ、早や先きに立つての案內顏に、其儘後に從つて行くと、非常に險惡な間道を拔け、漸くのことに本道に合した。其時の嬉しかつたこと、早速附近

の掛茶屋に其土人を連れこんで、珈琲と菓子とを馳走してやつたら、非常に喜んで聽て三拜九拜して立去つた。

吾輩は其茶店に蒸した馬鈴薯と肉の燒いたのがあつたので、それで腹を拵へ午後三時といふに出發、ランカッに着いたのが夜の八時頃であつた。

ランカッでは山下武雄といふ人が宿泊を承諾された。翌日デレに歸り再び英船に乘じて彼南に着いたのが四月十日であつた。

序だから此方面の吳服行商のことを話さう。東印度方面に醜業を營む日本の婦女其數幾百千、是に附隨する樓主誘拐者妓夫幾百、是等が是より說かんとする吳服行商人の常顧客である。

此方面に於ける吳服行商は恰かも富山の賣藥商の如きもので、諸々方々の顧客先を廻り其注文に應じて如何なる品でも置て行く。で、其代價は翌年行商の節支拂を受けるので、一見極めて危險のやうであるが、其實案外さうでない

そうだ。彼等行商人の語るのを聞くに、從來の經驗に依ると所謂買逃げをするが如きは殆んど絶無で、商人の方で顧客に不便を感せしめないやうにすれば、顧客も又決して商人に對する信用を傷ない、要之雙方共都合のいゝやうに、其處は妙にうまく行くといふことである。併し高いことも隨分高いので、日本で二十圓の品物は當然三十五圓はする。それで賣る方も承知なら、買ふ方でも無論承知だから面白い、總て此方面に於ける出來事は、何から何まで豫想外の事ばかりである。

(十二) 馬來半島を經て緬甸に入る

激烈なる熱病に罹る——親切なる介抱——廉賣まで無賃乘船——日本雜貨店——マンダレー迄無賃乘車——緬甸人の風俗——茫漠たる米田——飛込んだ處が計らずも醸業窟

彼南には最早永く留まる要はないので、直ちに出發馬來半島のコーランポに

渡つた。此地は有名なる錫の産地であつて、一升の土を掴めば其八合は錫で、迚も爪哇のカトク島などが及ぶべきでない。探掘は大抵支那人で其設備はお話しにならない程幼稚だ。尤も白人の經營は見るべきものがある。見てると三寸角一尺五寸棒に精錬して新嘉坡に輸出して居る。當時百斤九十六圓位であつたが、ズット以前は百斤三十六圓臺で取引したもので、段々産出が少くなる結果斯の如く高價になつたのであらう。

コーランポでは草野一次郎君の家に宿泊するの光榮を有した。滯在三日結束して起たんとする前夜、不幸にしく猛烈なる熱病に罹つた。日本を出でゝ滿八箇月、北清の酷寒と戰ひ熱帶の蠻境に出入し、而も未だ嘗つて病魔に襲はれたことはなかつた。然るに孤劍飄然同胞の足跡稀なる馬來の北部に入るに及びて不幸遂に起つ能はざるに至つたのは、吾輩の如何にも殘念で堪りなかつたところで、呻吟懊惱の一瞬時と雖も、此事だけは如何にしても忘るゝことができな

かつたのである。併し病は藥計りで治すべきものでない、氣を以て勝つべきものである。醫者もなく藥もなき馬來半島の一角コーランポで計らずも病を獲て一時は吾ながら此處で大往生を遂げるのだと覺悟を極めた吾輩が、前程五ヶ年餘の星霜を費し、無事親戚故舊に見ゆるを得たる所以のものは、實に凝りに凝つたる一種の精氣が、恐しき病魔を驅逐し得たのであるのみならず、當時草野君が一面の識もなき吾輩を一見百年の知己の如く、親切に丁寧に殆んど親身も及ばぬ程、介抱に手を盡して呉れたことが、吾輩をして今日あらしめた主要なる原因で、當時の窮狀を追回する度毎に、吾輩は感謝の涙を止め敢ぬのである。

一週間目に少し快くなつたので草野君の好意を謝し、其袂を捉へて止めるのも耳に入れず、病餘の瘦軀を提げ、スギプセを經て陸路テレンシンに向つた。此地方も錫の產出が盛大だ。併し其鑛區は大抵英國人の所有である。

此方面の日本醜業窟は他の東印度諸地方と異り、入口に目隱しがあつて、其

中に入ると所謂女郎が張店をして居るのが見える。而も長煙管を構へた處は大に國粹を發揮したもので、眞黑な素見の兄イ達をして、吸付煙草で魂を有頂天外に飛ばさしめる計略かと思ふと、吾輩もそゞろに物の哀れを催したのである

馬來半島北部探檢の目的を達し、三度び彼南に歸つたのが忘れもしない四月二十八日であつた。此處で緬甸國蘭貢行きの便船を待合すること二日、故國は八重の櫻花も盛り過ぎ、世は若葉の綠に彩られてん、四月も早や今日一日といふ三十日に、ラングン、インデマン、スチームシップ、コムパニーの社船なる英船マルダ號が、恰度蘭貢に向け出港すると聞き、直ちに船長トムソン氏を訪れて蘭貢迄の無賃乘船を談判して見ると、潮風に吹かれて膽玉の馬鹿に大きくなつた船長は、双手を擧げて吾輩の壯圖を贊し、早速二等船客の待遇で蘭貢迄無賃で乘せて行つてくれることを承認したのである。そこで出帆迄にはまだ時間があるので、一度マルダ號を辭し在留邦人の間を告別して廻り、旅裝を整へ午後

二時といふに愈々マルダ號の船客となりすました。

午後三時船は錨を拔いて彼南港を辭し去つた。熱帶の空は晴れて燒けるやうな太陽が、用捨なく頭の上から照りつける。上甲板は相變らず眞黑な甲板客で大入大繁盛。

夜半南風强吹し動搖甚だしく、終夜殆んど一睡の夢をも結ぶことができなかつた。

此方面には間々一等船客に印度人が居る。婦人携帶の連中も見えた。併し彼等は滅多に上甲板に出て來ない、どんな樣子かと竊かに研究して見ると驚いた彼等は一等船室にありながら備付の立派な寢臺に寢やうともしないで、アンペラ一枚敷いた上に跪坐を搔いて、夫で平然とすましこんで居る。料理人を捉へ黑色一等船客は船の食事をするかと訊ねて見ると、

「どうして貴客彼奴等は皆自炊でげすよ。」と冷かに笑つて居た。格別氣に止め

る風も見えないが、內々其蠻風に呆れて居たらしい。

ニコバル群島アンダマン群島を左舷に見て、五月一日午後一時頃イラワヂ河口を逆航し無事蘭貢に入港した。船が錨を投れるのを待つて、厚く船長に好意を謝し、輕船に乘じて其儘颯然として上陸した。

蘭貢といへば必ず蘭貢米を聯想する。實際來て見るとイラワヂ河を挾んだ兩岸は悉く精米會社を以て埋められて居る。各會社は大抵二百本位の杵を有つて居るが、其中でもカリー、ラスペル兩會社が最も盛大で、一日の精米高約四百俵以上だといふことである。

十年前迄には蘭貢米の日本に輸入される高は非常なものであつたが、近來頓と日本に捌けなくなつたそうである。其原因は三井物產會社が遲羅米を輸入し始めたからで、カリー會社の支配人などは、實際遲羅米と蘭貢米とを比較使用して、其良否を決定して貰いたいと酷く不平して居た。

日本人では加藤といふ電氣技師が最古の在留者で、其他雜貨店を經營しつゝある藤井植村などいふ人々が主なものである。

前記加藤電氣技師は蘭貢電燈會社に奉職して、他の英人技師と同じく非常に優待されて居る。藤井雜貨店主は北清事變後天津で餘程儲け、其後孤劍飄然として蘭貢にやつて來たので、當時獨逸人が安い日本雜貨を賣つて居たが、正直正銘の日本品を賣り始めたのは此藤井君が先頭第一であつたものだから、開店當時は石油箱に板を渡して陳列棚に代用した程慘澹たる有樣であつたにも拘らず、現今では非常に成功して其規模も中々大きい。

藤井君が斯の如く奮鬪的男子である處へ、其義兄と稱する植村なる人が鋭意藤井君を輔ける傍ら、其獨得の敏腕を揮つて止まなかつたので、商運隆盛恰かも旭日登天の觀があつた。

彼等兄弟の經營法は決して握拳丸的でない、進んで蘭貢碇泊汽船の甲板を訪

れ、士官水夫を相手に毎日餘程の商賣をしつゝあつた。

蘭貢には時々雜貨の糶市が立つ、此時は存外掘出物があるので、藤井兄弟は是等を買つて常に儲けつゝあつたものだ。といふのは時々素張らしい銀七寶などが、獨逸商人の手にあることがある。而も本人夫程高價な品だとは思はないから、糶市では二束三文殆んど無價同樣で、藤井兄弟のために糶落される。處が眞物の銀七寶とくると、五六圓位で手に入れたものが、三十五六圓なら翼の生えたやうに飛んでしまう。藤井雜貨店の今日ある決して不思議でも何でもない。

御多分には漏れない日本の醜業婦が、此處にも三四十人は居て、夫が相應に繁盛しつゝあるから妙だ。

滯在一週間緬甸の首府マンダレーに向ふことにした。

蘭貢マンダレー間鐵路五百八十哩、無錢の身には翼なくして達し得らるべき

でない。是に於てか無賃乘車の必要が起つてくる、首尾能く成功するかどうか物は當つて碎けろといふから、先づラングン鐵道會社の社長を訪問し、一談判試みて不幸旨く行かなかつた時は、其時は其時の風が吹くとして、一日テクテク會社に行つて見ると恰度社長も出勤して居るので、早速刺を通じて面會を求めると、どうぞ此方へと導かるゝ儘、例の異樣な風俗で社長室に入つて行つた。驚くかと思の外ツト起つた社長は、先づ吾輩の手を握つて善來と叫んだ。

貴重な時間を費さしむるのも氣の毒、話は手取早いが上策だと思つたので、早速マンダレー迄の無賃乘車を承諾されたい旨丁寧に申入れると、物の道理の能く解つた英國人のことであるから、三等切符で澤山だといふのを、無理遣に一等乘客の取扱で無賃乘車を承諾してくれた。是でホツト一息！

其日の午後マンダレー行きの急行列車に飛乘つて、ラングン停車場を出發したが、途中壯觀極る米田を送迎し、緬甸の米作事業の偉大なのに一驚を喫した。

乘合客も餘程あつた。一等列車に乘る位だから大抵此國上流の紳士淑女であらうが、其風俗が頗る妙だ。まづ吾輩と向ひあつた婦人を觀察しはじめると、頭髮は當時日本に流行するハイカラ風なのに似たところがある。其頂邊に挿してあるのが眞赤な花簪だ。若い婦人ばかりかと思ふと强ちさうでない、白髮の老翁と並んで居る齒拔けの老媼の頭にも此花簪が挿されてある。男女共素足で皮の雪駄を穿いて居る、鼻緒のノゲ方も日本のと少しも變らなし。吾輩さう思つた。是は屹度日本から輸入したのに相違ないと。處が後になつて夫が緬甸傳來のものであつて、少しも日本的の意味がないと解つたときは、此國男女の容貌が日本人に酷似して居るさへあるに、雪駄までが全然同じであるに至つては吾輩も一時は吃驚せざるを得なかつたのである。

次に隣席に座を占めた紳士を觀察すると、婦人の服裝が非常にヂミであるにも係らず、紳士連ときたら堪らない、例の腰卷が桃色の大市松である。頭に卷

きつけた絹の布が、十人が十人屹度桃色か若くは紅だ。

緬甸婦人は眉毛に入墨をして居る。日本の俳優のひき眉毛と同じで、美人といはれるもの程好んで行るのだ。そうでそれに驚くのは老媼で顔や腕に入墨したものがあることだ。

吾輩の隣に居た紳士は、窓外萬頃の稻田を指し、前方の山の麓まで悉く自分の所有地であると話した。嘘か眞か保證はできないが、鐵道線路から其山の麓までは慥かに廿哩以上あるやうに思はれた。若し果して紳士の言の通りだとすると、此紳士は緬甸でも大地主の一人であらう。

翌日午後六時頃汽車はマンダレー驛に到着した。停車場を出て日本人の居所を訊くと、例の赤帽が親切に敎へて呉れた。日本人居留地といひたいが、どうもさうはいへないから日本人の居所と書いたが、外でもない例の醜業窟なのだ。マンダレーに來ては其處を訪れるより外に行く處はない。日本人といへば醜業

婦及び其抱主ばかりだから詮方がない。

赤帽に敎わつた通り來て見ると成程日本人が居る。いふ迄もない婦人だ。路次の突當る木造の二階家を訪れると、年の頃なら卅七八、顏の白粉燒けのした眼瞼が氣味惡く黑くなつて、生際の薄い婦人が出て來て、是は又意外だといつたやうな顏付をして入口に突立つた儘、吾輩の顏を穴のあく程凝視て居る。何しろ異樣な服裝をした風來坊が飛込んのだから、先方も定めし驚いたであらうが、まづ名乘りをするに如くはないと、名刺を出して無錢世界探檢旅行の次第を物語ると、何は兎もあれどうぞ此方へと導かれたのが二階の應接間、丸卓を中にして吾輩と主婦とは相對して座を占めたのである。

當時日本の無賴漢が多く東印度諸地方に入込み、夕に銅色男子を迎へ、朝に黑色の郎を送る醜業婦が、同胞の慰藉同情なきに泣いて居る矢先を見計ひ、甘い口車に乘せて衣類所持金までを捲上げつゝあつたことを聞いて居たので、先

づ此種の誤解を避けるために口數を盡して述べ立てると、先方も始めて安心したと見え、

「實は英國政府の命令で、廓内には日本の男子は入れないことになつて居りますが、さういふお話でムいますれば、宜敷うムいます、手前共でお宿を致しますから、どうぞお心置きなく御滯留遊ばしませ。」と早速承諾してくれて、夫からは下へも置かぬ待遇振り、直ぐ一間を吾輩の專用にあてがひ、其晩は女將が心盡しの御馳走に長途の疲勞を忘れたのである。で、此俠骨稜々たる女將軍の名が、島村おさき嬢といふことも、其厚意を感謝すると共に是非共附加へて置かなければならない必要事であるのだ。

(十三) 秘密乘車

島村おさき嬢――此處でも例の幻燈會――ほんとに面白かつたわ――大に優待された――美人馬車を驅つて吾輩を停車場に追ふ――理事者が不

在だ――只乘と決心――驛長の同情――一等室に頑張つて居た――奇策を廻らす

翌日マンダレーの市長を訪問した。會談數刻、丁重なる接待と種々なる便宜を得だことを感謝し、嚮て此處を立出で舊緬甸の王城を見た。

外濠を渡ると廣い馬場がある。恰度日本の丸の内のやうだ。内濠を渡盡したところが舊御本丸即ち王城である。建築の宏壯なことは今更いふ迄もない。

王城を見終つて舊緬甸の將相が、其下に永劫冷かなる眠りに就いて居るといふ墓地を見た。墓石は悉く純白の大理石であるので、其立派さ加減唯々驚くの外はないのである。

墓地と少し離れて一大佛像がある。見ると釋迦の像だ。最初一寸見たときは不思議なこともあるものだと思つた。何故かといふと、佛像は大抵眞黑なものときまつて居る。實際夫が眞實なので、釋迦が印度の黑坊の出である以上、ど

うしてもさうなくては叶はぬ道理である。然るに吾輩の見た釋迦の像は純白であつたものだから、是は少し可怪しいなと思ひながら近寄つて見ると、純白と見えたも道理、其像は最上等質の白色大理石で刻まれてあつたので、今更のやうに其見事なのに驚いてしまつたのである。

夕方島村おさき嬢の家に歸ると、餘り遲いから迷子にでもなつたのではないかと、たつた今一同と心配して居たところだといふので、早速晩飯の馳走に預つたが、其夜例の幻燈會を開いて、北淸事變の戰況を映して見せると、女將始め誰も彼も大喜びで、

「ほんとに面白かつたことよ。」と一個が囁けば、

「そうね、妾幻燈なんて初めてよ。」といふのがある。恐らく是は九州の田舍から引張られて、終に幻燈なんか見ずにしまつたものであらう。

「アラちよいと隨分田舍者ねおまゐさんは、妾故國に居たとき能く見てよ。」と

是は恐らく村の衞生幻燈會でも見たものと見える。

各國聯合軍の中、英國印度兵が行軍する處を映して見せると、

「おへそさん御覽なさいな黑奴の兵隊が……」と頓狂な聲をして指す。夫子自ら黑奴の枕席に侍するのであることを忘れて居るらしい、矢張り幻燈映畫の刺戟に依つて、日本撫子の自覺心が勃然として起つてくるものと見える。此點は大に頼母しい。

八時頃から開會して終つたのが彼是十一時過ぎ、愉快なる島村女將軍は、其夜に限り引手數多の嫖客を謝絶し、其米櫃たる女郎共をして無邪氣な歡樂に耽らしめた。

「誠に難有うムいました。お蔭樣で女郎共も大變面白い思を致しました。何しろねえ、平常餘り娛樂といふものがないもんですから……。」と揉手をしながら感謝して居た。

夜半珍酒佳肴が運ばれた。訊けば吾輩の勞を慰するためだといふ。無錢坊風來居士がマンダレーの片隅は日本女郎屋の二階で、珍酒佳肴を以て迎へられんとは、あゝ吾ながら有繋に思及ばなかつたことであつた。

其晩吾輩の寢た室は昨夜のと違つて非常に立派であつたのみならず、其備付の寢臺がダブルベッドの頗る振つたものであつたには、何となく少し面喰つてしまつたが、後で聞と其室は女郎が客を迎へる時の用に供するもので、幻燈會のために一切の客を謝絶つたために、特に其晩だけ不用に屬したのを、好意を以て吾輩を是に導き入れたのであつだそうだ。

翌日マンダレー市中の小學校を訪問し、幻燈會を行つていくらか旅費でも拵へやうと思つて、方々を廻つて見たが、何れの學校も悉く門を閉ぢ休校の態であつたので空しく立歸つた。是も後に知れたが此期節には總ての學校がベーションで生徒に休養を與へるのであるそうだ。

翌日は主に市中の商況を視察し、其翌日愈々マンダレー市を辭し去らんとしたのであつた。到る處同胞懷しさに是等遠征娘子軍から、多大の同情を獲つゝ來つたが、此マンダレー市では殊に熱實なるものがあつたので、俠女將軍島村おさき嬢は、貴下が必要とせらるゝ日數だけ、如何程にても宿泊に應ずるといつて居た位であつた。併し吾輩も前程を急ぐ身であるから、深く其厚意を謝し吾輩のために特に備つてくれた馬車に投じて、其儘停車場へと駈付けたのである。

來て見ると幸い發車にはまだ時間がある。是からラングン鐵道會社マンダレー支社の理事者を訪ふて、先づ最大要件たる無賃乘車を談判しなければならないので、其事務所を訪問すべく、停車場の出口に顏を出すと、前方から馬車を驅つて年若い日本婦人がやつてくるのが眼に入つた。接近して見ると島村女將軍部下の一女丈夫であつたので、何事が起つたのかと待構へて居ると、ヒラリ

馬車から飛下りて、

「あゝ間に合つてよかつたこと。」と呼吸を微ませて居る。

「どうしたのだい？」と訊くと

「貴郎が餘りお急ぎなすつたものですから、マントを置忘れていらつしやいました。」と古ぼけた汚いマントを大切さうに渡してくれた。

「どうも誠に難有う、態々すまなかつた。」と吾輩が夫を受取るや否や、彼女は一揖して再び馬車に飛乘り、御者が一鞭加へると共に、軈て其姿は熱鬧の中に隱れてしまつた。

美人馬車を驅つて無錢坊の後を追ふなどは、「其對照に如何にも小說的の味があつて面白い、若し吾に流水の情あり彼亦落花の心があつたならば、否應なしに此處に一場の悲喜劇が演ぜらるゝのであつたかも知れないが、幸にして其事なかつたのは、讀者のためには誠に慶すべき極みであつたのだ。呵々。

日本人、殊に未だ外國の味を知らないものは、馬車に乘るといふことを非常に豪いことのやうに思ふ。即ち置忘れのマントを提げて、吾輩の後を追ふた女郎が、馬車を驅つたの故を以て、彼等をしかく威勢のいゝものとするのは甚だしき早計で、歐米では勿論此地方では馬車即ち日本の人力車で、途上馬車を呼ぶ是れ辻俥を傭ふに均しく、傭付の馬車は例の宿俥と一般で、決して驚くには當らないのである。

マントを受取り事務所に行つて見ると、折惡しく理事者が出勤して居なかつたので、其足で直ぐと自宅を訪問して見たが矢張り不在。妻君に面會して訊くと、直ぐ歸る筈であるから少し待つて見るがよからうといふ。然らば御免と應接室に尻を据え、主人公の歸宅を今か今かと待つたが、中々歸つて來ない。其内に妻君有繋に氣の毒になつたと見え、遭達水やサイダーを出して御馳走してくれた。而も主人は歸らない、詮方がないので筋は遠うが妻君に話して見やう

と思ひ、主人に面會の用向きを話すと、困つたといふ顏付きをして、どうも妾單獨では如何とも取計らい兼ねますと、大に道理なことをいふ、事に依ると旦那樣の一存にも行かない無賃乘車の一件が、妻君に返答のできやう筈がないと解つて見れば、其儘便々と待つても居られないので、厚く妻君の好意を謝して辭し去つた。

其足で停車場に歸つた、驛長に一談判試みてやらうと思ひ、刺を通じ驛長に面會を求めると、早速應接室に導いて會つてくれた。餘談は後廻しとして早速無賃乘車の話をすると、是も如何にも困つたといふ風に小首を傾けて居る。

「どんなものでせう、不可ませんですかなア。」と驛長の顏色を覗き込むと、

「兎に角車掌を呼んで何とか方法を講じませう。」といひながら呼鈴を押すと緬甸人の使丁がやつてきた。

「お呼びになりましたか。」

「蘭貢行き急行列車に乘る車掌を一人呼んで來い。」と命ずると嬶て一個の英人車掌が入つて來た。で、何か兩個でヒソ〳〵と話したやうであつたが、發車の時刻も差迫つたので、件の車掌は急ぎ吾輩を拉して一等列車に連込んだ。何だか煙に卷かれたやうだつたが、素人考へで三等室で構はないから、どうか其方にして貰いたいといふと、

「三等室では不可ません、途中で切符を調べますから、安心して一等室にいらつしやい、惡いやうにはしませんから。」といつてくれたのでホット一息。

發車時刻がくると長蛇の如き大列車は動きだした。吾輩は無切符で而も一等室に平然と構へて居るのだから、車掌が安心しろとはいつたものゝ、心中何となく不安を感じ、汽車の搖れる度毎に無錢旅行の苦しさが、ヒシ〳〵と胸に刻み込まれる。

處が茲に困つたことができたのは、マンダレーから乘つてきた車掌は、途中のタルカマ驛で新車掌と交代しなければならないやうになつたので、是には有繋の吾輩も面喰ひ、又責任を負ふて此處まで連れて來た車掌も、吾輩の仕末には途方に暮れたらしかつた。で、其車掌がタルカマ驛から乘込む交代車掌に、吾輩のことを話して見やうといふのを止めて、

「却つて構はんで置て下すつた方がいゝです。若し其人が嚴重しくいふと困りますから、何有僕のことなどは少しも御心配に及びません。」といふ内に早や發車の號笛が鳴響いたので、

「誠に難有う、どうか驛長によろしく。」といつて固く握手を交換した時は、プラットホームの柱を二三本をやり過して居た。

其車掌がヒラリ列車から飛下りたのを見て、吾輩は依然知らぬ顔の半兵衛然と、一等室の中央に兩肩を怒らして頑張つて居た。併し内心では蘭貢に着いて

から如何にして無切符をゴマかさんかといふ大問題が往來しつゝあつたので、一策を廻らし得る迄には、片時たりとも安き心とてはなかつた。

バゴダといふ驛を通過するとき、多くの象が停車場構内で、蘭貢行きの貨車に、其鼻を以て尺角三間位の大材木を安々と積み込む奇觀を見た。餘り珍しく感じたので、吾輩の隣に居た緬甸紳士が英語の巧みなのに乘じ、種々象に關する質問を試みたが、其時其人の語るのを聞くと、斯の如く營々として木材積載に從事する象も、晝食時になると如何に叱咤し如何に激烈に鞭撻するも、彼は頑として動かないそうである。而も是が疲勞して駄々をこねるのでなく、晝食を食はんことを要求するがためであるとは、象も又中々無邪氣な動物ではないか。

是も其紳士が話したのであるけれども、或處では汽車の火事を、其時恰度通り合した象群が、飼養主の命に從ひ、附近の小川に駈付け、其長く太い鼻にし

、、、ただか水を吸來り、今や炎々として燃盛りつゝある焔を目掛けて注ぎかけたので、有繋の猛火も遂に大事に立至らずして消えたといふことであるが、何と妙な話ではないか。

這麼ことを話してる內に愈々汽車は蘭貫驛に到着した。まづ綽々たる餘裕を示さなければならないので、悠然と立上り荷物を提げて改札口に向つた。茲に吾輩の奇策がある處だ。先づ混雜にまぎれ手荷物を改札口に出して置いて、直ぐプラットホームから驛長室に豪然と入り込んだ。固より誰も怪しむものはない。見ると驛長先生は何か驛員に下知をしつゝある際中であつたことゝて、吾輩が內側から入つたのか外側から來たのか一向氣が付く道理がない。曩きにマンダレーに向つて此驛を出發せんとするとき、吾輩の顏は驛長の能く知る處となつて居たのであるから、突如として驛長室に入り込み、無事マンダレー行を終へて歸着したことを告げ、併せて曩日の好意を感謝する吾輩を、、、、まさかに汽

車の只乘りを行つたゝ思ふ程、蘭貫驛長の事務は閑散でない。即ち數分にして驛長室を辭するに及び、彼は熱實なる握手を與へて、吾輩の健康を祝し前途の成功を祈つてくれた。いふまでもない改札口はまだ混雜してる。知らぬ顏をしながら荷物を提げて立去つた吾輩に此時恐らく一瞥を與れたものもなからう。

(十四) 汽船ラン號に於ける奇遇

ペゴ大寺院——面白い緬甸人の名——見たやうな人だ——一等運轉士ピーターセン君——那威號の密知——悲慘たる最後——小說の如き因緣話——老船長の追回談——覺海の如きベンガル灣——五百羅漢の裸體踊

蘭貫では例の藤井雜貨店に宿泊するの光榮を有した。

一日ペゴの大寺院に參詣した。門番は吾輩に向つて、貴下は基督敎徒か佛敎徒かと訊くから、何故那麼事を訊ねるのかと反問すると、彼曰く、基督敎徒は靴の儘殿內に入るも差支なけれど、佛敎徒は靴を脫せざれば一歩も殿堂內に入

るを得ざればなりと。吾輩は是を聞いて世にも不合理なことがあるものがなと思つた。佛教徒をして靴を脱せしむれば、何故に異教徒も是に倣はしめざると、大に抗議を申込んでやりたい處であつたが、相手は無學文盲の門番先生、説法しても手ごたえありと見えなかつたので、羅馬に入れば羅馬に從へといふ諺もあるから、其儘沈默つて靴を脱ぎ堂内を一巡して、其朱塗や金箔の美しいのと、柱といふ柱が總て鏡を以て包まれた奇觀に驚いて出て來た。聞けば此大寺院は某富豪が未來の冥福を祈るために、單獨建立したものであるといふことである。

當時日本產の羽二重が多く珍重がられて居た。洋傘なども相應の賣行があつたが、中にも臺灣から輸入された樟腦が、虫除けとして好評を博しつゝあつたのは面白いと思つた。

新嘉坡蘭貢間直航の汽船賃は、中等五十圓甲板客九圓、彼南蘭貢間は中等

三十圓餘甲板客四圓位である。

緬甸の美人が長さ六寸直徑五六分の葉卷形の卷煙草を口にしながら、得意然と市中を散歩しつゝある態は、吾人日本人の眼から見ると、姫御前のあられもないと言ひたい圖で、何とも早やお座の醒め果た次第である。

緬甸人の名は一寸面白い、シャン、カチン、チン、カリンなどゝ、物體の音響に似たのが多いのは滑稽である。

六月十二日愈々蘭貢を出發することにした。便船はロイド會社のラン號、四千九百六十噸といへば汽船では餘り小さい方ではない。

繫留浮標を離れたのが午後三時頃、熱いには熱かつたが海上は本穩だ。ロイドの社船だから速力は疾い、イラワヂの濁流を蹴立てゝマルタバン灣に出た。船の進むに連れ輕風南吹し快言ふべからず。

フト船橋を見上げると、今し當直をしてる一等運轉士の後姿が、嘗つて新嘉

坡遥羅間を便乘した那威號の一等運轉士ピーターセン君に酷似である。他人の空似かとも思つたがさうでない、ブク〳〵と麥酒樽のやうに太つた體を、白リンチンの制服に包んで、片肱を羅針盤に掛け右足を少し曲げて靴の尖端をつま立てゝ居る點は、どう見ても那威號に居たピーターセン君であらねばならぬ。吾輩は斯う思ひながら夫となく前部甲板を散歩しつゝ、船橋を見上げると案の定、例の童顏に愛嬌を堪え傍の二等運轉士を相手に、切りと快談しつゝあるのが、那威號でも圓滿の評判が高かつたビ君であつた。

其夜ビ君が當直から下りて來るのを待つて訪れると、先方も大に其奇遇に驚き、早速吾輩を食堂に引張込み祝杯を擧げるのだといふ。難有迷惑だが詮方がない、折角の好意だから高等船員の食堂に行くと、船長事務長機關長其他運轉士機關士、總て非番の連中が一所になつて夕食際中であつた。恰度此處へ兩個が入つて行つたのだから、先づ視線は一樣に吾輩に向つて集まつてきた。夫で

も氣輕な船員のことであるから、澄した顏色をしてるものはない、一等運轉士が一同に紹介してくれた時は、最う百年も前から知合つてゞも居るやうに心安くなつて居た。

其晩の吾輩のもてたことは非常であつた。ビ君と那威號の昔でも語合ふと思つても、間斷なき話頭は吾輩に向つて集中する。中には無錢探檢旅行はいゝとしても、故國に殘した最愛の妻君の事を考出すと、早く歸國りたくなりはしないかなどゝ、嬶孝行の西洋人だけに、大に道理なことをひやかし半分に訊く奴がある。さういふ御當人こそ、夜半慘たる月光を浴びての航海に、其インナーポケットに納め奉つた最愛の嬶大明神の寫眞を取出で、人知れず堪えぬ思を熱烈なる接吻にまぎらす男であるだらう。

夜が更けると共に話の花が漸く散りかけた。相對して語るはビ君と吾輩とだ。天候險惡の徵があると船橋から注進があつた。道理で先刻から動搖が激しいと

思つた。怒濤が躍込む慮があるので、舷窓は悉く密閉してある。室内の空氣は蒸されるやうに熱い、宵の内電燈がパッと輝いて居たが、夫さへ見えざる霞に掩はれて、何となくドンヨリとして居る。

「那威號の船長以下諸君は相變らず健在ですか。」と訊くと、何故かど君の顔はさつと曇つた。

「那威號とや!?」といつたのみ、暫らく無言であつたが、更に思起したやうに

「君はまだ其悲慘なりし最後を聞き玉はずや?」と聲を落して太い溜息を吐く。

「否少しも聞きません、一體どうなつたんですか。」と急き込むのを、ど君は悲しげなる眼元で靴の尖端を凝視めつゝ

「邏羅から君を乘せて歸つて、慥か三度目の航海であつたと思ふ、霧中獨逸郵船と衝突して沈沒してしまつたです。」と恰かも當時の慘狀を追回するものゝ如く、兩眼を閉ぢて

「君船長は其航海を濟したら、那威に歸國つて樂しい晩年を送る筈でしたよ。」と力を込めて斯ういつた時には、吾輩も思はず

「夫では船長は船と一所に……。」と言ひも終らぬに

「悲慘な最後を遂げられました。」と投げたやうにいふ。

「……」

「併し船長には其方が或は本望であつたかも知れません。何しろ三人の兄弟の後を追つたのですからなア。」

「では悉く海で……」

「さうです、長兄は北極探檢の途上で、次兄は印度洋の大颶風に、他の一人は捕鯨船の遭難で、三人共悉く海で亡くなられたのです。で、夫人や子息衆が手紙で一日も早く海上生活を止めさやうに嚴ましく申送られる度毎に、笑ひながら「最う乃公もいゝ加減に船乘は止さう。」といつて居られたですが、

夫でも海の味が忘られないと見え、僕が其述懐を聞いてからでも三年經ちますからねえ。」とビ君の顔には益々憂愁の色が漂ふた。

奇しき運命に囚はれた四人の兄弟に關する、小説の如き物語を聞いては、ビ君が九死中に一生を獲たことを祝する機さへ失つたのである。

ゴロゴロと氣味惡く響く操舵機の音、ゴットン、ゴットンと波を蹴る推進機の響に、夜は益々更け渡つて、兩個が言葉少く語る老船長の追回談や遭難當時の恐しき有樣など、悉く切ない追想の材料となつて、今しベンガル灣の怒濤に揺られつゝある吾輩も、舷たゝく波の音色に恐しき大暗示でも籠つて居るやうに思はれてならなくなつた。

嚮て食堂を辭し興奮せる精神を少し休むるために、上甲板に出て見ると、空一面墨を流したやうに曇つて、時々凄慘なる電光が魔の海にも似たるベンガル灣の闇を輝す。驟雨でもやつてくるか、生溫かい風が氣味惡く顔を撫る。青い

左舷々燈、赤い右舷々燈が、朦朧と荒れ狂ふ海を彩つて、宛然冥路を染むる提灯のやうに物凄い。

あゝ不快な晩だとやほら身を起して、下甲板に降らんとする時、果然！果然!!!　乾坤を傾け盡したやうな大雷雨が襲來して、ラン號は立どころに粉碎し去らるゝかと思はれた。

烈風颯々、猛雨沛然、上甲板は甲板客が驚き騒ぐので、大混雜、大叫喚、大阿鼻、恰かも地獄の釜が破裂したやうな騒動だ。甲板客も黑ければ水夫も黑い、加之に黑漆を流したやうな常闇だ。若し此有樣を見ることができたら、五百羅漢が裸體躍を行るやうだらうと思つた。

此荒天は拂曉まで續いた。吾輩は一睡もすることが出來なかつた。甲板客は尙更困つたであらう。あゝ總て物事は安からう惡からうである。

翌日正午前にアキャブ港に投錨、貨客の積卸しを濟ませ假泊半日、更に錨を

拔いて出港、針路をガンヂスの河口に向けて航走ること時あり、滔々たる濁水を遡つて茲に印度はカルカッタ港に投錨したのである。

(十五) 牛糞の如き印度人

カルカッタ市——恐しい人食鳥——何とも早やお目出度い——動物園——エドン公園——市街は牧場の如し——點々たる牡丹餅の壁——是れ悉く牛糞ならんとは——薪炭の代用——婚禮行列——日本人倶樂部

カルカッタ市は印度最大の都府である。

此處では西本願寺から派遣されて梵語を研究中であつた大宮師の寓居に厄介になつた。寓居といつても、決して旅館住居でも堂々たる借家でもない、宛然是れ九尺二間の裏店で、熱心な大宮師は同じ研究の伴侶なる清水文學士と共に、自炊生活をして居られたにも係らず、風のやうに來つた吾輩に、進んで宿泊を勸められたのは、實に感謝措く能はざるものがある。

吾輩の未だ印度に入らざる前、カルカッタの壯麗なる都府であることは耳にして居たが、是れは又聞きしに勝る立派さ、是では歐米の大都會に比して決して遜色はない。而も驚く可きは、斯る繁榮なる大都に人食鳥の居るとである。

で、此人食鳥は恰かも日本の雀が、屋根の上にチユウ〳〵群がつて居る如く、カルカッタ百萬の甍の上に、其恐しい嘴を鳴して獲物やあると、往來を見下しつゝあるのだ。尤も人食鳥といつても往來の人間を掴んで喰ふ譯でない、要之一種の肉食鳥で、人馬牛犬苟くも死骸となつた以上、決して好嫌はいはない猛鳥である。大きさは七面鳥位はある。首が長くて烏のやうに眞黑だ。如何にも貧相で地獄からでも飛できたかと思はれる、それは〳〵氣味の惡い鳥である。

カルカッタの賤民は毎朝市場へ買出しに行く、歸路には買物を入れた笊を頭の上に載せて歸つてくる。而して其中には串に挿した燒肉などがある。人食鳥は毎朝棟の上に整列し、往來を見下しながら市場歸りを今や遲しと待つて居る

のだ。其處へ恰度頭に笊を載せて通掛るのだから堪らない。人食鳥はヒラ〳〵と飛下り、笊の中の燒肉を攫んで、難有うとも何とも言はずに屋根に上つて、さも美味さうにムシヤ〳〵と嚙つて居る。其惡々しさは迚も見て居られない、而も印度人は一向平氣で、追散らすでもなし笊に蓋をするでもなし、洒啞々々として其攫むに任せつゝあるのだ。實に何とも早やお目出度い。

吾輩は是等の光景を見、自分のことのやうに道々業を煮しながら、世界第一と稱せらる、カルカツタ動物園を見物に行つた。成程堂々たるものである。是では世界一と誇られても無理はない。無論印度人がこしらつたのではない、カルカツタ動物園の今日ある、固より英國人の力であるが、夫にしても世界あらゆる方面の動物を網羅し盡したのは豪い。就中吾輩の眼に最も珍しく映じたのは、猿の種類を澤山集めた中に、人間に酷似せる猩々の一種が、其愛兒を抱いて餘念もなく其顔に見入りつゝあつたので、大きさも人間と變らない處へ、其

子供の抱方が如何にも人間化して、吾輩の如き一時は孫を抱ける老婆にあらずやと思つた程で、恐らく世界奇獸列傳に其名を列ぬべきものである。

今一つは鼠猿とでもいふのか、其形小にして恰かも鼠の如き奴が居る。頭部に赤色の毛を戴き、顏面白色、其動作は宛然電光石火の如くである。

動物園を出てエドン公園に行つた。吾輩は此公園がカルカツタに於ける唯一の樂園であるが故に、エデンの樂園にちなみて、エドン公園と稱へらるゝのかと思つたらさうでなかつた。名の起因はエドン嬢がカルカツタ市に寄贈したので、斯く命名されたのであるといふことであつた。

園内にニポールから持つて來たといふ塔がある。木造だ。恰かも日本の五重塔に似たところがあるが、而も其層は唯一階である。塔上の前後左右に各一個の佛像が安置してある。

吾輩の行つた時は左程でもなかつたが、日沒時になると在留歐米人が、馬車

を驅つて悉く此處に集まつてくるから、其賑かなことは非常であるそうだ。園内の音樂堂では樂隊が切りにブー〳〵ドン〳〵と囃立てる、夫を聞きながら紳士淑女が相携へて散歩する處は宛然繪のやうであると。何しろフグリー河（恒河の海に注く處）に望んだ景勝の地だから、カルカッタ第一の納涼場としてあるのも無理はない。

公園からの歸路、街道の眞中央に痩せこけた牛がゴロ〳〵して居るのを見て唯最う屹驚してしまつた。京に田舍ありといふ言葉は陳腐だ。カルカッタの街路は牧場の觀がある。何と風變りな處ではないか。更に裏店の路次に入つて見るに及んで、更に〳〵驚膽の眼を丸くした。といふのは外でない、裏店の壁に牡丹餅樣の物がたゝきつけてあるのを見ての話だ。吾輩も一寸見た時には夫が何であるか、少しも見當がつかなかつたので、一個の男を捉へて訊いて見ると是れ悉く牛糞ならんとはで、驚いたも、最初少し變な臭氣があるワイ

とは思ひながらも、眞逆に牛糞であらうとは思はなかつたので、暫らくは開た口か塞がらず、何の役に立つかと訊ねたのは、驚愕是を稍々久しうしてからで、其如何に不思議に感じたかゞ是でも解るだらう。

牛糞畢竟何するものぞと、是れ百家必需の薪炭である。誰か薪炭を無用視するものぞ、印度人の牛糞を尊ぶ固より其所で、苟も日常薪炭を使用する國民は、敢て是を怪しむに足りない筈だが、夫にしても牛の糞を炭や薪に代用するとは、吾人其沒常識に呆れざるを得ないのである。

併しかゝる融通の利かないことを、印度人の前でいつたら夫こそ笑はれる。何となれば其人は最も良質の薪炭を、平氣で委棄しつゝある大の罰當りであるからで、乾燥したる牛糞が木炭以上の火力と持久性を有するものであると解つて見れば、斯ういはれても最早グウの音も出ないであらう。

宜なるかな、カルカッタの裏店の壁といふ壁は、點々たる牛糞を以て彩られ

て居る。而も牛糞の缺乏を慮る勿れ、印度最大の大都カルカッタの往來にまで牛が放牧してあるではないか。

大聖死して三千年、印度は到底牛の糞の如しだ。噫!!!

一日カルカッタの街上で印度の婚禮行列に遭遇したが、是は又支那のそれに比し、一層振つたものであつた。花嫁花婿は麗々しく仰々しく飾立てた山車に乘つて、飾付の人形然とすまし込で御座る。で、其山車は牛四頭乃至六頭で曳くのであるが、町内の若衆及多くの兒女も曳綱に就き、賑かな奇妙な奏樂の音に連れて、靜々と町の眞中を練つて行く、而も新夫の年が想應に老けて居たにも係らず、其嫁御寮がまだ漸く十歳前後であつたには、有繋の吾輩も少し面喰つてしまつたのである。歸つて大宮師に其奇觀を語ると、

「あれで富豪になると三日三夜さ騷ぎ廻るのだから驚く。」といつて居られた。

言ひ落したが新婦の兩側には、花やかに着飾つた二人の少女が侍して、拂子

樣のもので始終四邊を拂つて居た。其度毎に山車を曳く若衆が歡聲を張上げて若夫婦の壽を祝福しつゝあつた。

日本では十二月から翌年四五月頃迄に、多く結婚式を擧げるが、印度では四月より八月までを結婚の好時期としてある。但し黃道吉日を選ぶことだけは變りはないそうである。

日本は一年を四期に區分するが、印度では六期にわかれて居る。即ち左の通りだ。

四月中旬——六月中旬　グリーシマ（夏期）
六月中旬——七月中旬　ワルシャア（雨期）
七月中旬——九月中旬　シャラズ（雨後）
九月中旬——十一月中旬　ヘーコンメ（秋期）
十一月中旬——一月中旬　シ、ラ（冬期）

一月中旬——四月中旬　ワサンタ（春期）

日本では釋迦の誕生日を四月八日とするが、印度では二月八日が其日に相當する。是は日本の太陽暦と印度暦と二個月の相違があるからである。

月夜を白分、闇夜を黑分といふ。一日十五日は米飯を食はない。日本で此兩日は赤飯を焚くのと少し趣が異つて居る。月の十一日は斷食の日であるそうだ。

清水師の語るのを聞くと、釋迦は北部印度のルミンデイに生れ、カシヤヤで大往生を遂げたといふことである。前記ルミンデイはベナレス地方から十八里北で、カシヤヤはニポールの南卅里、タシルデオリヤを東北に距る廿三里である。バスチーには佛骨の八分の一が殘つて居るといふことだ。

カルカツタでも各學校を訪問して、例の幻燈會を開かんことを申込だ。スルト皆喜んで承諾して呉れたので、早速今夜は器械持參でやつてくるからと立去らんとするを引止めて、夜は都合が惡いから晝にしてはくれまいかといふ。幻

燈は夜の開會に定つて居るが晝とは又どうした譯かと訊ねて見ると、實は印度人の習慣として夜間の外出を喜ばない、成るべくなら午後六時迄に濟むやうにやつて貰いたい、でないと困るから御相談に應じかねるといふ。そこで詮方がないから、早速大宮師の寓居に歸り、幻燈器を引擔いで學校に赴き、一講堂の窓を締め黑布を以て光線を遮り、約二時間程映畫して直ぐ次の學校に移り、一日三校の割合で三日間の興業に、大略十個の學校を廻つたが、結果は非常に能かつたやうである。

カルカツタの日本女郎屋は、香港新嘉坡乃至他の各地に於けるものと、大に趣を異にして居るので、其家屋及營業方法が中々ハイカラであるのみならず各樓主の經營にかゝる日本人倶樂部は、慥かに印度南洋方面に於ける遠征娘子軍中に異彩を放つて居る。

早合點しては困る、女郎屋の主人公に依つて組織された倶樂部は、恐らく遊

興を強ゆる一種の機關ではあるまいかと、否々決してさうでない。一體日本人で印度視察に來るものゝ不便とする處は其旅館で、多額の旅費を持つて遊山三昧の旅行なら格別、カルカッタに來るものゝ多くは、佛教研究とか佛跡調査が主なる目的で、上等の旅館に頑張つて費を盡す譯に行かない。といつて下等の旅館には種々なる障害と弊習があつて、迚もポット出の日本人には安心して滯在することができない。要之日本人倶樂部は此不自由を救濟せんとする目的で建てられたもので、いはゞ各樓主の暗黑なる他の一面に於ける慈善的光明面で、輕い財布を首に掛けて印度に來たものは、大抵此倶樂部から多大の便宜を得るので、其献身的設備に對して感謝しないものは、未だ一人としてあるまいと思はれる。

(十六) スードラの奇習

處女の屍體と交らしむ——轉た凄慘の感に打たれる——一婦多夫の習慣
——天下第一の無精者——盜賊種族——世襲の權利だ——サルタン愛想を盡かす

カルカッタ滯在中、清水大宮兩師に就て隨分面白い寧ろ奇妙な話を澤山聞くことを得た。吾輩は茲に是等を一括して讀者諸君に紹介したいと思ふ。

印度でスードラ族といへば四姓の中下等に屬する種族で、一般から殆んど奴隷視される賤民であるが、是には一寸話の材料になりそうな奇習があるやうだ。

スードラは其娘のまだ成熟期に達しない前に結婚させるが、若し不幸成熟期に達しても未だ一度も男子と交らせないで死んだときは、どうしても一定の男子をして、其屍體と交らしめなければ止まない。で、若し是をしないと其家名が汚れるばかりでなく、スードラの習俗を破つたものとして一般の擯斥を受けるのである。併し如何にスードラの賤民でも普通の人間は、屍體と交るやうなこ

とは好まないと見え、吾こそはとボランチーアする、好事者がないので、止むを得ず乞食に多額の金錢を與へて、其大役を務めさせることにして居るといふことである。

元來風俗とか習慣とかいふものは、奇妙だとか珍しいとかいふので、他國の人には面白くも可笑しくも感ぜられ、殊に旅行者などの興味は多く是に依つて起るものであるが、スードラが乞食をして其娘の死屍を姦せしむるに至つては、吾輩轉た凄慘の感に打たれざるを得ないのである。近來英政府が人道の見地からして、此惡習の打破に全力を盡して居ると言へば、遠からず此種慘劇の跡を絶つだらうが、吾人は一日も早く光明の日の來らんことを願つて止まない。

是もスードラの一族であるが、ドラバンゴール及印度の西海岸に住むてナイル族と稱するのがある。此種族の婦人は實に妙で一婦にして數夫を有する權利がある。尤もモルモン宗徒が同時に一夫多妻であるのとは、少しく其趣を異に

して居て、ナイル婦人は一定の期間一婦一夫で、隨意に其夫を變更することを得るのである。近來日本でも婦人の道念が漸次搖いて來て、其德操を二三にする婦人が日々增えてくるといふことだが、此種の獸的婦人は宜しく自然主義を奉ずる墮落女學生と共に、ナイルの族中に追放してやつたが宜いと思ふ、是れ一擧兩得の良法ではないか。

カルナチックといへば印度の北部だが、此處にもスードラの一族が住むで居る。是は又極めて亂暴で男女共一度新衣を着けたが最後、未來永劫でも其衣服が破れて到底纏ふ能はざるに至るまでは、決して修繕しない、決して洗濯しない、天下の無精者は宜しくカルナチックに移住すべしである。

前述の如く洗濯といふことを知らない彼等のことであるから、其衣服が塵や垢に汚れても、泥土や砂に塗れても、更に本人平氣である。殊に此地方の婦人になると、汚れた手を必ず其衣服で拭くからして、其衣服から紛々たる惡臭が

四方に散じて、到底其附近に寄れたものでないのである。

カルナチック地方は山間で非常に水に乏しい處であるから、自然に無精になつたのだ無理はないが、若し衣服を洗濯したのを發見ると、其者は直ちに土地から、放逐されるに至つては實に猛烈ではないか。

此地方のスードラが斯く無精になつたのは、貴重なる貯水の保存上必要であるからしてまづ止むを得ないとしたならば、大に同情すべき餘地があるやうだが、能く訊いて見ると水が乏しくて洗濯しなかつた習慣も、現今では一種宗教的の性質を有つて居るやうになつたのであるそうだが、是に於て吾人は其お目出度さ加減にアッと開いた口が塞がらないのである。

處女の屍體を姦せしむる惡俗、終世濯がざるの奇習、共にスードラ中の族に見る一大特色であるが、茲に同じ族中にクルラル族といふのがある。マラバルの沼海地方に棲んで居て、其職業は盜賊であるそうだ。人に訊くとクルラルな

る族名が、既に盜賊といふことであるとのこと、何と呆れた種族があるではないか。

クルラル族の輩は盜賊を以て世襲の權利なりと心得て居るから、他人の物を竊むといふことは決して惡いことでないと頑張つて居るのみならず、人若し汝何するものぞと問ふあれば、彼等肩を怒らし得々然と、吾は世襲の盜賊なりと答ふることを憚らないといふことである。

クルラルがマラバル地方に居ると同時に、此地方にはマライ、コンヂガルなる一族が居る。彼等は實に男女共殆んど赤裸々で、細繩を腰に卷き小布片を以て局部を掩ふて居るが、唯僅に申譯に過ぎないので、局部は常に曝露し醜體見るに忍びない。

往昔マイソールのサルタンが遠征して此地に到り、其醜態を見て大に驚き、早速酋長を呼んで何故に斯る亂暴な眞似をするかと詰ると、彼答へて曰く、是

民の貧窮と種族制の然らしむる處又如何ともする能はずと。サルタン曰く、誠に然るか、併しながら斯の如きの醜態は人たるものゝなすべきものにあらず、汝貧なりといはゞ吾歳々汝の部下に衣服の資を贈らんと、酋長サルタンに謝して曰く、厚意謝するに辭なし、而も希くは自然の儘に放任せられよ、若し強て吾等に衣を纏へといはゞ、吾等又止むを得ず深く林中に遁れ、思ふが儘に吾等の種制を守らんのみと。

サルタンは此言を聞いて呆れてしまつた。愚人度するに法なし、乞ふ是を自然の儘に放任せんのみと言つて、夫からといふもの敢て一言も干渉しなかつたといふことである。

（十七）厄介な波羅門

極端なる潔癖――入浴狂――滑稽なる水喧嘩――用便しても入浴――さうかと思ふと手鼻をかむ――見てると吹出したくなる――相交るの後十

六回の含嗽をする――泛常識なる診察法

印度四姓の内で最も上位を占めて居るのは波羅門であるが、此又波羅門といふのが頗る面白い種族で、有繋に自ら上等人種だと號して居るだけに、一スードラ族に見たやうな奇習はないが、而も其潔癖に至つては吾人をして驚かしむるものがある。

波羅門の傑癖は其宗教上に於て最も重大なる事柄であるのだ。

吾輩は其泛常識なる彼等の潔癖を紹介するに先ちて、茲に有名なる一小話を掲げ、以て其前提にしたいと思ふ。

印度を旅行した人は大抵耳にすることで、決して珍しい話ではないが、讀者が膽をつぶさないやうに、是非話して置かなければならない。

嘗て一個の波羅門が西洋人の處に出掛けて行つて、推薦狀を書いて呉れと依頼に及んだ。頼まれて西洋人は早速に承諾に及び、スラ〳〵と筆ペンを走らし

書き終つたのを唾液で封口を濡し、掌でトンと押して波羅門に渡した。ところが是を見た波羅門は大に怒り、折角書て貰つた推薦狀を投捨てゝ立歸つた。常識を以て判斷すると此男の行爲は全然狂氣の沙汰とも思はれるが、波羅門たる彼には充分赫怒すべき理由があつたので、習慣上無意識に唾液で封口を濡したといふことが、彼潔癖を尊ぶ波羅門には非常に無禮な仕打と見えたので、斯くは決然として席を蹴て立去つたのである。

吾輩は是より彼等がいかに清潔を尊ぶかを物語らうと思ふ。

是は日本にもある習慣だから敢て珍しくはないが、印度では葬式に列つたものは、必ず水浴して其身體を清めなければ決して家に入らない。日本では燒場で骨上げをすますと、歸途には必ずお清めと稱して酒をのむことになつて居るが、是等と會葬歸りの入浴とは一寸似た點がある。先づ是迄ならば日本人には少しも不思議はないが、例令何百里何千里を隔てゝ居ても、人の死を耳にした

ものは、既に其身は穢れたものとしてあるから、彼等は必ず水浴して其穢れを洗落すことにして居る。

讀者はまだ此位の事に驚いては不可い、婦人が出産する、先づ一個月は別居しなければならない、其間決して家財などに觸れてはならぬ。で、別居の一個月が經過すると、沐浴して改めて家に入ることを許される。だから月經時などは尙更のことだ。別居沐浴は勿論のこと、其間に身に纏つて居た一切のものは洗濯しなければ止まない。

日本人の潔癖は歐洲人の驚く處だが、吾輩などは此話を聞いた時、迚も日本人は波羅門には叶はないと思つた。波羅門は宗教的義務として、一日一回は何んなことがあつても水浴しなければならない、而も交際が廣く自然と身體や衣服の穢れる場合の多いものは、一日中少くとも三四回は水浴するそうだ何と驚くべきではないか。

波羅門が印度四姓中第一位にあるといふことは、尊大なる彼等に取つては非常な誇で、從つて他種族を賤むことは、實に吾人の豫想以上である。

印度には方々に貯水池なるものがある。然るに前に述べた通り、波羅門の尊大主義より、從來は彼等の專用貯水といふものが別にあつて、絶對に他の來り酌むことを許さなかつたのである。處が現今では英國政府の干渉で、貯水池は四民共同となり、決して彼等の我儘を許さなくなつたので、詮方なく〳〵他の種族と共に、同一貯水池から水を酌むやうになつた。

さア斯うなると這度は毎日々々水喧嘩が、貯水池邊に絶えたことがない、何處までも厄介なのは波羅門である。若しスードラの水瓶が波羅門の水瓶に觸れると、波羅門は直ちに自分の水瓶を破壞し去つてしまう。尤も是は土製の水瓶だが、金屬製の水瓶ならば丁寧に磨かなければ決して再び使用しない。

彼等の潔癖に關してはまだ〳〵面白い話がある。

彼等が用便をした後は、非常にめんど臭い水浴をする、是は其用便に依つて受けたる身の不淨を清めんためである。だから人が若し波羅門に向つて、西洋人は用便後決して手を洗はないと話しても、彼等は夫を信ずることはできないので、斯る不潔事はあり得べきものでないと心得て居る。

元來風俗習慣には矛盾があるものだが、波羅門にても然りで、彼等が鼻汁をかむ處を見ると實に面白い、恰度日本の下等社會で能く見る如く、指で一方の鼻孔を押へ、他の鼻孔よりシユ〳〵と鼻汁を吐出すので、而も鼻汁に依つて穢されたる指をば、水で洗ふとか紙で拭きでもすることか、附近の壁や柱に塗つて更に本人平氣ですましこんで居る。實に妙である。

波羅門が身に不淨を受くると、必ず沐浴し其手足を濯ぐが、而も彼等は是を以て決して滿足しない、屹度其口を嗽がなければ止まない、毎朝起床後洗面時に際し口を嗽ぐのは、日本人でも西洋人でも行らないものはないが、波羅門に